

中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団第25回訪日報告書

目次

報告書の刊行にあたって	1
中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」寄付金申込社（者）一覧	2
2019 年度中国日本商会役員名簿	3
2019 年度社会貢献委員会委員名簿	5
2019 年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿	6
程海波団長挨拶	7
主催、共催団体の概要	8
第 25 回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団 団員名簿	9
第 25 回訪日ホームステイ受け入れリスト	10
第 25 回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程	11
第 25 回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト	12
< 訪日記録 >	
JAL 整備工場 (11/26)/ 担当：北京師範大学	15
Panasonic Design Kyoto (11/27)/ 担当：北京大学	17
京都大学 (11/27)/ 担当：北京語言大学	19
SONY (11/29)/ 担当：中国伝媒大学	21
三菱商事 (11/29)/ 担当：外交学院	23
三菱 UFJ 銀行 (12/2)/ 担当：北京語言大学	25
日比谷松本楼 (12/2)/ 担当：中国伝媒大学	26
中国大使館 (12/2)/ 担当：外交学院	28
早稲田大学 (12/2)/ 担当：北京師範大学	30
ホテルニューオータニ（エコセンター）(12/3)/ 担当：北京大学	32
学生たちの感想文から	34
学生たちの観た日本	50
学生たちの撮った写真	65
第 25 回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日活動メディア報道リスト（中国語のみ）	1

第 25 回中国大学生「走近日企・感受日本」 訪日団報告書の刊行にあたって

本書は、中国日本商会が実施する「走近日企・感受日本」事業の第 25 回訪日団の報告書です。

本事業は、当会が会員からの寄付金を原資として、中国人大学生を訪日視察に招待派遣するもので、2007 年から年に 2 回実施しており、今回までに 33 大学 765 名の学生に参加頂きました。

本年は日中青少年交流推進年であり、本事業もその記念事業の一つとしての認定を受けて実施されました。次代の中国を担う若者に日本の実像に触れてもらう機会を提供する本事業は、日中両国民の相互理解の増進に大きく貢献しているものと自負しております。

第 25 回訪日団は、2019 年 11 月 26 日から 12 月 3 日までの 8 日間、5 大学から選抜した 25 名で編成され、各訪問先において貴重な交流と体験をし、無事に終了いたしました。

このたびの訪日では、京都、東京で会員企業 6 社を訪問させていただいた他、京都大学、早稲田大学における日本の大学生との交流、中国大使館訪問、京都の名勝や日比谷松本楼の視察、一泊二日の日本の家庭へのホームステイ体験など、多彩なプログラムを実施しました。ホームステイの受入れにご協力いただいた企業数は 17 社にのぼっております。

このように本事業は、寄付金のみならず中国日本商会の会員企業の多大なる協力と貢献のもとに実施されています。これまでに協力いただいた視察先は 64 機関、交流大学は 10 校、ホームステイのホストファミリーは 560 家族にのぼります。また、共催団体である中国日本友好協会に全面的なご協力を頂くとともに、一般財団法人日中経済協会、中国友好和平発展基金会と公益社団法人企業市民協議会（CBCC）に適切な寄付金の管理を行って頂いております。改めて、本事業実施にご支援、ご尽力を頂いているすべての関係者に厚くお礼を申し上げます。

本事業は日中関係が厳しい環境にある時にも敢えて継続して参りました。本事業に参加した大学生たち、あるいは彼らが交流した日本の学生たちが、将来、日本との交流の懸け橋となり、さらに強固な日中交流関係の促進の為に貢献してくれる事を、我々、中国ビジネスに関わる企業としても心より期待しております。

中国日本商会としては、今後も、本事業を通じて次代の中国を担う若者の日本との交流と理解促進を図って参る所存でございますので、引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

中国日本商会 会長 小野元生

2019 年 12 月

中国日本商会社会貢献事業「走近日企・感受日本」 寄付金申込社（者）一覧

【寄付金】600万円

1	アサヒグループホールディングス株式会社
2	伊藤忠商事株式会社 伊藤忠(中国)集团有限公司
3	日本製鉄株式会社
4	住友商事(中国)有限公司
5	東芝(中国)有限公司
6	トヨタ自動車株式会社
7	丸紅(中国)有限公司
8	みずほ銀行(中国)有限公司
9	三井物産(中国)有限公司
10	三菱商事株式会社
11	三菱UFJ 銀行(中国)有限公司
12	三菱電機(中国)有限公司
13	日本航空株式会社
14	全日本空輸株式会社

【寄付金】250万円以上～600万円未満

1	キャノン(中国)有限公司
2	アルプス(中国)有限公司
3	住友化学投資(中国)有限公司
4	ソニー(中国)有限公司
5	中外製薬株式会社
6	テルモ(中国)投資有限公司
7	豊田通商株式会社、豊田通商(中国)有限公司
8	松下電器(中国)有限公司
9	三井化学株式会社
10	三井住友銀行(中国)有限公司
11	三菱化学控股管理(北京)有限公司

合計60社名

* 個人の方は寄付当時の所属(企業名)を記入しています。

【寄付金】100万円以上～250万円未満

1	旭化成株式会社
2	株式会社 I H I
3	岩谷(中国)有限公司
4	株式会社資生堂
5	JTB グループ(新紀元 /JTB)
6	JXTG エネルギー株式会社
7	双日(中国)有限公司
8	東京海上日動火災保険株式会社
9	野村ホールディングス株式会社
10	北京電通広告有限公司
11	三井住友海上火災保険(中国)有限公司 三井住友海上火災保険公司 駐中国総代表处
12	匿名希望

【寄付金】1万円以上～100万円未満

1	日本農林中央金庫有限公司
2	AGC(中国)投資有限公司
3	宝酒造株式会社
4	東レ株式会社
5	あいおいニッセイ同和損保
6	大和証券株式会社
7	凸版印刷株式会社
8	豊田汽車金融(中国)有限公司
9	日立租賃(中国)有限公司
10	高橋修三 (個人・長富宮飯店)
11	武田勝年 (個人・元三菱商事)
12	熊琳 (賛助会員)
13	株式会社ブリヂストン
14	米原佳彦 (個人・阪和商貿)
15	世達志不動産投資顧問(上海)有限公司
16	JA 全農
17	日中経済協会
18	今村浩 (個人・NTT DOCOMO China Co., Ltd)
19	コクヨ家具(中国)有限公司
20	ヤマハ発動機株式会社
21	稲葉雅人 (個人・NTTデータ(中国)投資)
22	茶山秀一、岩城拓 (個人・日本科学技術振興機構)
23	陳言 (賛助会員)

2019年度中国日本商会役員一覧

2019年12月18日現在

	商会役職	氏 名	会社名	役職
1	会長	小野 元生	三井物産	専務執行役員 東アジア総代表
2	副会長	福田 祐士	伊藤忠	副社長執行役員 東アジア総代表 アジア・大洋州総支配人
3	副会長	塚本 武	NEC	中国総代表 総裁
4	副会長	小澤 秀樹	キャノン	副社長執行役員、キャノンアジアマーケティンググループ社長、キャノン(中国)社長
5	副会長	川下 竜一郎	北京凱迪迪愛通信技術	董事長
6	副会長	高橋 望	日本製鉄	執行役員 中国総代表 北京事務所長
7	副会長	御子神 大介	住友商事	常務執行役員 東アジア総代表
8	副会長	伊藤 伸一	凸版印刷	北京事務所 首席代表
9	副会長	前川 智士	トヨタ(中国)投資	総経理
10	副会長	岩永 正嗣	日中経済協会	北京事務所 所長
11	副会長	米澤 章	日本航空	執行役員 中国地区総代表
12	副会長	堂ノ上 武夫	日本貿易振興機構	北京事務所 所長
13	副会長	平澤 順	丸紅	執行役員 中国総代表
14	副会長	菅原 正幸	みずほ銀行	常務執行役員
15	副会長	川本 善幸	三井住友銀行(中国)	北京支店 支店長
16	副会長	平井 康光	三菱商事	執行役員 中国総代表
17	副会長	小原 正達	三菱UFJ銀行(中国)	副董事長
18	理事	亀倉 隆志	岩谷産業	常務執行役員 中国総代表
19	理事	西村 康	双日	常務執行役員 中国総代表
20	理事	近藤 隆弘	豊田通商	専務執行役員、東アジア地域統括兼総代表
21	理事	藤塚 正彦	阪和興業	執行役員 中国総代表
22	理事	陶 履徳	日鉄住金物産	北京事務所 所長
23	理事	村山 龍太郎	IHI	北京代表処 首席代表
24	理事	上田 敏裕	AGC	執行役員 中国総代表
25	理事	青山 傑	コスモ石油	北京事務所 首席代表
26	理事	市川 正人	クボタ	北京事務所 首席代表
27	理事	池松 克紀	JFEエンジニアリング(北京)	総経理
28	理事	西村 伸吾	JXTGエネルギー	執行役員 中国総代表
29	理事	日比 賢二	東京電力	北京代表処 首席代表
30	理事	今井 正志	アルプス(中国)	総経理
31	理事	堂園 憲治	NTTコミュニケーションズ(中国)	北京分公司 総経理
32	理事	宇平 直史	NTTデータ	執行役員 中国総代表
33	理事	本間 雅之	NTT DOCOMO China通信技術	董事長
34	理事	高橋 洋	ソニー	執行役員、ソニー(中国) 董事長&総裁

35	理事	宮崎 洋一	東芝	中国総代表
36	理事	横尾 定顕	パナソニックチャイナ	董事長
37	理事	高澤 信哉	富士通(中国)	董事長兼総経理
38	理事	小原 弘嗣	マルチメディア振興センター	北京代表処 首席代表
39	理事	富澤 克行	三菱電機	執行役員 中国総代表
40	理事	棕野 貴司	旭化成	上席執行役員 中国総代表
41	理事	西山 寛	アステラス製薬	高級顧問
42	理事	山田 江樹	衛材(中国)薬業	薬政本部長
43	理事	稲澤 彰	資生堂(中国)投資	技術本部 本部長
44	理事	安藤 洋	住友化学投資(中国)	総経理
45	理事	寺師 啓	東レ	北京事務所 所長
46	理事	松崎 宏	三井化学	理事 中国総代表
47	理事	小林 義和	三菱化学控股管理(北京)	董事長 総経理
48	理事	趙 克非	第一生命ホールディングス	北京事務所 首席代表
49	理事	東 善明	日本銀行	北京事務所 首席代表
50	理事	山田 圭介	日本財産保険(中国)	北京分公司 総経理
51	理事	米坂 樹紀	農林中央金庫	北京駐在員事務所 首席代表
52	理事	李 京華	三菱UFJ 証券ホールディングス	北京事務所 首席代表
53	理事	三宅 英夫	全日本空輸	上席執行役員 中国統括室長兼北京・天津支店長
54	理事	杉山 龍雄	日本通運	常務執行役員 東アジア地域統括
55	理事	高泉 宏康	日本郵船	中国総代表
56	理事	今井 誠	イトーヨーカ堂(中国)投資	董事長
57	理事	中井 大祐	交通公社新紀元国際旅行社	董事 総経理
58	理事	小金井 英生	スターツ北京	華北地区統括 総経理
59	理事	谷口 利英	全日空国際旅行社	総経理
60	理事	瀬川 祥司	長富宮中心	常務副総経理 ホテル総支配人
61	理事	石川 恵太	北京電通広告	董事 総経理
62	理事	近田 年史	北京首開野村不動産管理	董事 総経理
63	理事	浅田 隆司	日中経済貿易センター	代表理事 理事長
64	理事	田中 雅教	日本国際貿易促進協会	北京事務所 所長・首席代表
65	理事	厚谷 禎一	KPMG	パートナー
66	理事	喜多羅 和宏	国誉家具(中国)	北京分公司 総経理
67	理事	小久保 憲一	日立製作所	執行役専務 中国総代表
68	理事	越智 博通	北京博通行商貿	董事長・総経理
69	理事	篠原 康人	三井住友海上火災保険(中国)	北京分公司 総経理
70	理事	山本 努	北京丘比食品有限公司	総経理
71	監事	三浦 智志	監査法人トーマツ	パートナー
72	監事	越智 幹文	国際協力銀行	首席代表

2019年度社会貢献委員会委員名簿

2019年12月現在

	氏 名 (会社名・役職)
社会貢献委員長	福田 祐士 (伊藤忠 副社長執行役員 東アジア総代表 アジア・大洋州総支配人)
委員	塚本 武 (NEC(中国) 中国総代表 総裁)
委員	小澤 秀樹 (キャノン 副社長執行役員、キャノンアジア総代表、キャノン中国 社長)
委員	川下 竜一郎 (北京KDDI通信技術 董事長)
委員	高橋 望 (日本製鉄 執行役員 中国総代表 北京事務所長)
委員	御子神 大介 (住友商事 常務執行役員 東アジア総代表)
委員	伊藤 伸一 (凸版印刷 北京事務所 首席代表)
委員	前川 智士 (トヨタ自動車(中国)投資 総経理)
委員	岩永 正嗣 (日中経済協会 北京事務所 所長)
委員	米澤 章 (日本航空 執行役員 中国地区総代表)
委員	堂ノ上 武夫 (日本貿易振興機構 北京事務所 所長)
委員	平澤 順 (丸紅 執行役員 中国総代表)
委員	菅原 正幸 (みずほ銀行 常務執行役員)
委員	川本 善幸 (三井住友銀行(中国) 北京支店 支店長)
委員	小野 元生 (三井物産 専務執行役員 東アジア総代表)
委員	平井 康光 (三菱商事 執行役員 中国総代表)
委員	小原 正達 (三菱UFJ銀行(中国) 副董事長)
委員	三宅 英夫 (全日本空輸 上席執行役員 中国総代表 北京・天津支店長)
委員	中井 大祐 (交通公社新紀元国際旅行社 董事 総経理)

2019年度社会貢献委員会ワーキンググループ委員名簿

2019年12月現在

会社名	氏名	役職
【社会貢献委員長】	福田 祐士	伊藤忠 副社長執行役員 東アジア総代表 アジア・大洋州総支配人
【WG座長】	岩永 正嗣	日中経済協会 北京事務所 所長
アサヒグループホールディングス	飯塚 喜美子	行政局主任
伊藤忠(中国)集团有限公司	山崎 聡実	東アジア経営企画グループ
キヤノン(中国)有限公司	福井 穂高	コーポレートコミュニケーション戦略本部副総経理
日鉄諮詢(北京)有限公司	柳田 拓朗	部長
交通公社新紀元国際旅行社有限公司	中井 大祐	董事 総経理
住友商事(中国)有限公司	中原 誠	人事部 部長
	米 健	中国総代表助理
全日本空輸株式会社	片桐 稜太	銷售部
東芝(中国)有限公司	葉丸 法之	副総裁
トヨタ自動車(中国)投資有限公司	栗田 弘毅	渉外部主査
日中経済協会 北京事務所	澤津 直也	副所長
日本航空株式会社	永島 大地	営業担当
日本貿易振興機構 北京事務所	日向 裕弥	副所長
日立(中国)有限公司	半田 浩晃	副総経理
丸紅(中国)有限公司	澤田 健太郎	中国総代表助理
みずほ銀行(中国)有限公司 北京支店	山崎 誠	副支店長
三井物産(中国)有限公司	松井 磨	企画業務部/人事総務部部長
三菱商事(中国)商業有限公司	李 征	総務法務CSR部 副部長
三菱電機(中国)有限公司	王 蕾	経営企画室 主管
三菱UFJ銀行(中国)有限公司 北京支店	張 婷	企画部 北京本部
【オブザーバー】	菅原 孝介	日本大使館 広報文化センター 一等書記官
【オブザーバー】	田中 麻美子	日本大使館 經濟部 一等書記官
【訪日中のアテンド等】	笹原 信	日中経済協会 (東京) 総務部 参与

第 25 回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团報告書 団長挨拶

2019 年 11 月 26 日から 12 月 3 日にかけて、第 25 回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团一行 29 名は 8 日間の日本訪問を行いました。

今回の代表团は北京大学、北京師範大学、北京語言大学、中国伝媒大学及び外交学院の優秀な学生により構成されています。日本滞在期間中、団員らは日本航空、パナソニック、ソニー、三菱商事、三菱 UFJ 銀行、ホテルニューオータニといった日本企業 6 社への訪問、京都大学や早稲田大学の学生との友好交流、高台寺や箱根等での茶道、座禅、温泉といった日本の伝統文化体験の他、周恩来詩碑及び日比谷松本楼では偉人の足跡をたどり、中国駐日大使館では日中関係の歴史や発展の現状について学び、日本の一般家庭においてはホームステイを体験いたしました。団員らは今回の活動を通じて日本企業の進んだ技術や経営理念を目の当たりにし、日本の同年代の若者との友情を育み、さらに日本の歴史や文化そして日中関係について理解を深めるなど多くの収穫を得ました。

日中両国は一衣帯水の隣国であり、二千年以上の交流の歴史において平和そして友好は常に主流、また両国の人々の共通の願いでもありました。昨年以降、両国首脳の方強いリーダーシップの下、日中関係は正常な発展の軌道に戻り、長年目にする事のなかった両国関係の改善・発展に向けた新たな動きが現れています。今年 6 月、習近平主席は安倍晋三首相と大阪で会談し、新時代の要求に合った日中関係を共に構築するとの点で共通認識を得るなど、両国関係の発展における方向性を示しました。日中友好の根本は民間にあり、その未来は青少年に掛かっています。両国政府は今年 2019 年を日中青少年交流推進年と定め、今後 5 年以内に双方は 3 万人規模の青少年の相互訪問交流を行います。日本の経済界が支援する青少年交流活動である「走近日企・感受日本」中国大学生訪日プロジェクトは 2007 年の開始以来、その客観性・緊密性・実践的・友好的との特色から日中の青少年交流における有名ブランドとして関係各方面より高い評価を頂いております。中国日本友好協会は日中青少年交流推進年を契機とし、中国日本商会、日中経済協会及び日本の関連各企業の皆様と共に「走近日企・感受日本」中国大学生訪日関連事業を確実に実施し、両国の友好と未来を担う青少年の交流をさらに強化し、日中の代々の友好のための新たな原動力を絶えず育む所存でございます。

最後に、今回の代表団の日本訪問に際して多大なご支援を頂いた中国日本商会、日中経済協会に改めまして心より感謝申し上げます。

第 25 回「走近日企・感受日本」中国大学生訪日代表团 団長
中国日本友好協会副秘書長
程海波

主催、共催団体の概要

中国日本商会

在北京企業の円滑な事業活動を支援するとともに、日中間の経済交流の活発化を通じて、日中友好を促進することを目的として、1980年10月に設立された北京日本商工クラブを前身とする。中華人民共和国国務院令第36号「外国商会管理暫行規定」に基づき認可された外国人商工会議所の第1号として、1991年4月22日に設立された。

会員数は、2019年12月末日現在、市内法人会員541社、市外法人会員65社、個人会員10名、賛助会員11名の合計627社(名)を擁している。

中国日本友好協会

1963年に中華全国総工会、中国人民外交学会など19の民間団体によって発起設立された、中国における最も代表的な対日民間友好組織である。創立以来、周恩来総理の提唱の下で積極的に対日友好交流活動を展開し、1972年の中日国交正常化と1978年の中日平和友好条約の締結においては大きな貢献を果たした。政治、経済、文化、スポーツなどの各分野で対日友好交流事業を強力に展開し、健全で安定的な両国関係の推進に重要な役割を果たしている。

中国友好和平発展基金会

中国人民対外友好協会の下部組織として、1996年に設立された。各国との友好増進、国際協力の推進、世界平和、共同発展を主旨とし、世界平和と人類の進歩に貢献するため、中国と海外各国との友好事業を始め、文化、教育、医療衛生、環境保護、スポーツ、経済、貧困支援などの数多くの分野で社会的公益活動を行っている。

一般財団法人日中経済協会

経済産業省を始めとする日本政府及び日本経済団体連合会他経済界の支援の下に、日本と中国との経済交流促進のため、1972年に設立された。

第25回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団団員名簿

	姓名	性別	所属		専攻
団 長	程海波	男	中日友好協会	副秘書長	
団 員	姜姍汝	女	北京大学	都市・環境学院	生態学
団 員	張力丹	女	北京大学	心理・認知科学学院	心理学
団 員	李書承	男	北京大学	心理・認知科学学院	心理学
団 員	王遠非	男	北京大学	信息科学技術学院	スマート科学・技術
団 員	張一諾	男	北京大学	化学・分子工程学院	化学
団 員	肖 瑾	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団 員	郭蓓蓓	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団 員	張琬怡	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団 員	張競文	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団 員	桂嘉雨	女	北京師範大学	外国言語文学学院	日本語
団 員	税金妹	女	北京語言大学	東方言語文化学院	日本語
団 員	林龍玉	女	北京語言大学	東方言語文化学院	日本語
団 員	牙 暢	女	北京語言大学	東方言語文化学院	日本語
団 員	黄 鑫	男	北京語言大学	東方言語文化学院	日本語
団 員	黄德尧	男	北京語言大学	東方言語文化学院	日英復語
団 員	任光建	男	中国伝媒大学	ニュース学院	ネット・新メディア
団 員	王一夏	男	中国伝媒大学	ニュース宣伝学部	ニュース学
団 員	鄭博航	女	中国伝媒大学	ニュース宣伝学部テレビ学院	ラジオ・テレビ演出
団 員	袁嘉憶	女	中国伝媒大学	テレビ学院	ラジオ・テレビ学
団 員	江篠芊	女	中国伝媒大学	国際メディア教育学院	宣伝学
団 員	張炯琪	女	外交学院	外語系	日本語
団 員	劉益琪	女	外交学院	外語系	日本語
団 員	姜雅琦	女	外交学院	外語系	日本語
団 員	薛欽月	女	外交学院	外語系	日本語
団 員	余嘉誠	男	外交学院	外語系	日本語
引 率	史兆紅	女	外交学院	副教授	
事務局	王 磊	男	中日友好協会	都市経済交流部副部長	
事務局	曾広明	男	中日友好協会	友好交流部職員	

第25回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察日程

日次	日 付	日 程	宿 泊
1	11/26 (火)	<u>国際線 (JL20便) にて北京より羽田空港へ</u> <u>【北京 8:35→羽田 12:55 JL20】</u> 13:42 貸切バスで移動 <u>14:00～15:30 ●企業訪問 ① J A L 整備工場見学</u> 16:30 羽田空港発 JAL127便にて大阪へ移動 17:35 伊丹空港到着 到着後、バスにてホテルへ 夕食(道中にて)	アリストンホテル 京都十条
2	11/27 (水)	ホテル8:45発 <u>9:30～11:30 ●企業訪問 ② (関西地区) Panasonic Design Kyoto</u> <時間の関係から昼食@PANASONIC> Panasonic 12:20発 <u>12:55～20:20 ◎大学交流① 京都大学 (含む懇親会)</u> ホテル20:50着	アリストンホテル 京都十条
3	11/28 (木)	ホテル8:00発 <u>★ソフト文化体験 ① 08:35 嵐山 10:30 高台寺</u> 12:45～14:00 昼食 京都 <u>14:32京都→16:35小田原 ひかり524 (新幹線体験)</u> 17:30 箱根湯本温泉着 <u>★ソフト文化体験 ② 温泉体験&和式宴会体験</u> 夕食:温泉旅館内にて和食会席料理	箱根湯本温泉 天成園
4	11/29 (金)	ホテル08:00発 <u>10:20～12:05 ●企業訪問 ③ (関東地区) SONY</u> 12:40～13:30 昼食 (品川) 14:00～15:00皇居(二重橋)見学 <u>15:30～19:30 ●企業訪問 ④ (関東地区) 三菱商事 (含む懇親会)</u> ホテル19:50着	東京 ホテルニューオータニ
5	11/30 (土)	<u>終日 ホームステイ</u>	学生:ホームステイ 東京 引率者:ホテルニューオータニ
6	12/1 (日)	<u>夕方までホームステイ</u> 夕方、各ホームステイ先よりホテルニューオータニ到着 着後自由行動	東京 ホテルニューオータニ
7	12/2 (月)	ホテル09:00発 <u>9:30～11:00 ●企業訪問⑤ (関東地区) 三菱UFJ銀行</u> <u>12:00～13:30 ★ソフト文化等視察②日比谷松本楼 昼食&講話</u> <u>14:05～15:35 ※中国大使館訪問</u> <u>16:15～19:45 ◎早稲田大学 ② (含む懇親会)</u> ホテル20:15着	東京 ホテルニューオータニ
8	12/3 (火)	<u>9:30～11:00 ●企業訪問⑥ホテルニューオータニ エコ視察</u> <u>12:00～13:45 歓送会 (ホテルニューオータニ)</u> 14:00 ホテル発 羽田空港へ移動 14:35 羽田空港着 17:15 羽田空港発(JL25便) <u>【羽田 17:15 → 北京 20:25 JL25】</u> 20:25 北京首都空港着	

第25回中国大学生「走近日企・感受日本」訪日団視察先出席者リスト

1. 日本航空株式会社 羽田整備工場

加藤 智也	ブランドエンゲージメント推進部エンゲージメント推進グループ 羽田工場見学担当	アシスタントマネジャー
根本 克也	同上	案内担当者
上田 綾子	同上	案内担当者

2. パナソニック株式会社 アプライアンス社 AP社直轄 デザインセンター

三浦 斉	マネジメント推進部	部長
藤川 恵美	デザイン統括部 ストラテジー課	主幹
中尾 洋子	マネジメント推進部 開発推進課	主幹
高橋 和也	マネジメント推進部 開発推進課	

3. 京都大学

川添 信介		副学長 理事(学生・図書館担当)
韓 立友	国際高等教育院	准教授
梶 佐和子	教育推進・学生支援部	国際教育交流課 課長
林 和彦	同上	同上 課長補佐
上木 正博	同上	同上 海外留学掛員専門職員
城野 真衣	同上	同上 海外留学掛員
京都大学生(リーダー) 勝村瑠海、中島大知、于再治、道又慧太、斎藤喬		

山田 圭則	京都府国際課	課長
山口 紳	同上	副主査

斉藤 健一	コーディネーター	
吉田 浄	同上	

4. ソニー株式会社

今田 真実	広報・CSR部	VP シニアゼネラルマネジャー
シッピー 光	広報・CSR部CSRグループ	ゼネラルマネジャー
岡田 康宏	同上	シニアマネジャー
馬 雪潼	人事センター 採用部	

5. 三菱商事株式会社

西浦 完司	コーポレート担当役員(地域戦略)	代表取締役 常務執行役員
平井 康光	中国総代表	執行役員
滝川 浩司	天然ガスグループCEOオフィス	
山口 智也	(株)メタルワン	グローバルトレード課長

岡崎 桃子	総合素材グループ総合素材・石油・化学管理部	
小山 憲之介	中央化学(株)	商品部担当部長
福田 圭馬	金属資源グループ金属資源本部	
沼尻 浩司	食品産業GCEOオフィス	
中島 祐介	電力ソリューショングループ新エネルギー・電力本部	
松井 孝治	複合都市開発グループアジア不動産開発部	
中西 佐和子	人事部女性活躍・ダイバーシティ室	室長
浅野 雄亮	サステナビリティ・CSR部	リーダー
小関 智也	総務部総務チーム	
小坂 展生	法務部コーポレート法務チーム	リーダー
福永 泰介	法務部法務第三チーム	リーダー
畑 勝之	法務部知的財産・デジタル法務室	室長
池田 敦	地域統括部 地域運営室	統括マネージャー
小林 正和	地域統括部 地域運営室	
楊 茹茵	地域統括部 地域運営室	
ナムチン・エンフジャルガル	地域統括部 地域運営室	
張 文博	地域統括部 地域運営室	
吉田 瑞穂	地域統括部 総括チーム	

6. 株式会社三菱UFJ銀行

関 謙次	経営企画部中国室	室長
野口 雄三	経営企画部中国室	副室長
武 進	経営企画部	調査役
周 瑛	国際業務部	調査役
宋 倩	国際業務部	

7. 日比谷松本楼

小坂 文乃		代表取締役社長
虫賀 武	宴会営業部	部長

8. 中国大使館

聶 佳	政治部	参事官
付 博	同上	二等書記官
王 曉瑩	同上	アタッシェ

9. 早稲田大学

白木 三秀	政治経済学術院	教授
宮本 昂汰	政治経済学部	白木ゼミ幹事長
石倉 拓一	国際部国際課	職員

10. ホテルニューオータニ

山川 剛	関西営業所	所長
前原 修二	関西営業所	
山田 聡	料飲営業部 料飲営業一課	係長
大高 恵太	ファシリティマネージメント部	
	ファシリティマネージメント課	課長
逆井 剛司	(株)シービーエス	
	ホテルニューオータニ管理所	副所長
長嶋 文悠	同上	ザ・メインセンター長

協力と挑戦

北京師範大学学生代表

見学日時：2019年11月26日（火）14:00-15:30

見学場所：日本航空 整備工場

見学概要

11月26日午後2時、私たち訪日団は定刻通りに羽田空港内の日本航空 SKY MUSEUM そして整備工場に到着した。

まず私たちは建物内の「航空教室」を訪れ、そこではスタッフからビデオや解説を通じ羽田空港の概況及び安全で快適なフライトの実現のための整備スタッフ、グランドハンドリングスタッフ、パイロット、キャビンアテンダント等の仕事について詳しい紹介があった。その後、私たちは整備工場の展示区域を見学し、そこでは空港の各種職員の業務や日本航空の歩みについて詳しい紹介がされていた。その他、さらに DC9 型航空機のcockpit内でのパイロット体験や、VR 技術による日常的な航空機の整備体験、制服を身に着けての記念写真撮影を行った。



20 分ほどの見学が終わった後、私たちは整備工場の二つの整備倉庫を訪れた。そこではまず二階から一つめの倉庫を見下ろし、スタッフからの航空機の整備の頻度やその方法についての紹介を受けた。その後、私たちは赤いヘルメットを被り二つめの倉庫に向かい、工場内部に足を踏み入れた。そこでは地上から至近距離で航空機や整備スタッフの仕事ぶりを観察した。さらに倉庫のゲート前で広々とした空そして目の前の滑走路での航空機の離着陸の様子を目にしたが、それはとても壮観であった。

こうして私たちは日本航空での見学を終えた。

なぜですか？

問：日本航空の「赤い鶴」（正式名称：「鶴丸」）のロゴマークにはどのような意味が含まれているのか？

答：「鶴丸」のロゴマークは、1960 年頃～ 2002 年まで機体塗装や制服のバッジ等に使用され、日本のみではなく世界各国で親しまれた。日本航空はかつて 2009 年時点での巨額の債務超過により、2010 年に東京地裁に会社更生法適用を申請すると共に、3 年間の大規模な再編計画をスタートさせた。再編の後、日本航空は 2011 年 4 月 1 日から、創業当初の精神に立ち返り、これまで培った「おもてなしの心」を守りつつ、未知の領域に足を踏み出して果敢に挑戦していく決意として、「鶴丸」のロゴマークを「再生の象徴」として改めて起用した。



問：日本航空と中国との提携の歩みはどのようなものか？

答：日本航空は 1974 年に他社に先んじて中国本土との航空路線を開通した。日中の国交正常化から 2 周年となった 1974 年 9 月 29 日、日本と中国を結ぶ定期航空路線が開通し、その後 30 年以上にわたり日中両国の間で人やモノの往来及び経済文化交流における空の架け橋の役割を担っている。日本航空は日中両国において非常に大きな航路ネットワークを有しており、北京の北京新世紀日航飯店はニッコー・ホテルズ・インターナショナルメンバーの一つである。2008 年、日本航空は中国民航安全学院との提携プロジェクトを始め、中国東方航空、海

南航空とはコードシェアを行っている。2019 年時点では中国行きの路線は 23 本で毎週 322 便余りが運行しており、北京、天津、大連、上海、広州、香港、台湾等の主要な都市や地区をカバーしている。

感想

日本航空は私たちが日本を訪れてから最初の訪問先であったことから、日本語の環境に完全には慣れていなかった私たちには見学において感激と共に多少の戸惑いもあった。だが今回の日本訪問における最初の活動である日本航空の見学では、多くの収穫を得ることができた。

まず私たちは企業内におけるチームワークの重要性を知ることができた。航空機のフライトはミスが許されないものであり、それと同時にいかに快適で安全なフライト体験を乗客に提供するかという点もまた大きな課題である。そして紹介ビデオを通じて私たちは、整備スタッフや空港の地上職員であれ、パイロットまたはキャビンアテンダントであれ、いずれも毎回のフライトにおいて自らの役割を発揮していることを知った。つまり言い換えれば、毎回のフライトや安全な着陸の背後には多くのスタッフの協力があるということである。この点から私は各業務の偉大さを感じることができた。どんなに些細で目立たない業務であっても、最終的な結果に影響を及ぼしているのである。最終的な結果の良し悪しを判断する基準はつまりこうした些細で目立たない業務にある。

次に、自由見学の際私たちは日本航空の発展の歴史への理解を通じて、「企業は競争において特色を追求する必要がある」ことを知った。昔、航空機は概ね輸送業において運用されていたことから、日本航空の初期の発展は主に航空機の載貨量や輸送速度の向上といった技術面にあった。そして近代になり企業間の競争が次第に激しくなる中、「いかに顧客を引き付けるか」、「いかにブランドの特色を構築するか」が最も重要なテーマとなった。私たちは、企業の競争が拡大している現代社会においては、企業のハードパワーを高めることよりも、顧客のニーズを真に理解し顧客に寄り添うことで人間本位のサービスプランを打ち出し、さらにいかに企業文化を浸透させ企業のソフトパワーを高めるかを考えることを重視すべきであることを知った。

東洋的デザインの美しさ

北京大学学生代表

見学日時：2019年11月27日（水） 9:30-11:30

見学場所：Panasonic Design Kyoto

見学概要

Panasonic Design Kyoto は 2018 年 4 月に開設されたパナソニックグループの家電分野におけるデザイン拠点である。歴史の記憶とモダンな文化が融合するこの京都という都市において、Panasonic Design Kyoto は伝統文化がもたらすインスピレーションを汲み取り、昔ながらのデザインを現代的科学技術に融合させることで東洋的特色に富んだ精美な商品を作り出している。

Panasonic Design Kyoto での活動内容は主に、同所の紹介、デザイン商品及びオフィスの見学、そして団員による「弁当」のデザインの三つであった。

まず、スタッフから同所のデザインにおける四段階の理念である「Notice、Think、Make、Convey」について紹介があった。これはデザイナーが人々の要求を知り、細やかに考え、大胆に創作し、デザインをする際の自身の心情を使用者に伝えることを重視するというものである。こうしたデザイン理念の下、デザイナー達は、自然に近いそよ風を生み出す素朴な外観の扇風機、刺繍模様に触れた時に音を発する特殊なスピーカー、両手で水平に持った時にだけ発光する安らかな心情を暗示する点灯方式の透かし彫り模様の電灯など多くの精美な作品を生み出している。その中で最も印象的だったのは茶筒型の小さなスピーカーで、実際に茶葉を入れることができるだけでなく、茶筒の蓋はスピーカーのスイッチにもなっていた。



スタッフの紹介に耳を傾ける団員たち



響筒

感想

こうした特徴的な作品から私たちは、商品のデザインによりいかにして民族としてのアイデンティティーを示すのかについて考えさせられた。これらの強い日本的スタイルの様々な商品は、消費者に対して自然と日本の伝統文化を伝えると共に日本の民族としてのアイデンティティーを示している。消費者市場において選択された文化は日本文化のすべてではないが、消費者に向けた商品は確実に文化的影響力を拡大する役割を果たすものである。そしてこれらの商品は海を越えて世界各地の消費者から好まれることで、古い歴史を持つ神秘的な東洋文明もまたその影響力を拡大するのである。

対して中国については、文化的蓄積がないわけではなく、5000 年の歴史を持つ大国ではあるが、中国文化の特色を表現するものについて私たちが思い浮かぶのは、相変わらず青花磁器、山水画、刺繍金襴である。青花磁器が悪いということではないが、もし文化や伝統を現代の商品と融合できれば尚良いと思う。この点について、Panasonic Design Kyoto の日本人デザイナーはすでに実現している。将来的に中国の次世代のデザイナーも私たちの伝統文

化を現代的科学技術と融合することで中国文化への自信を示し、新時代において私たちの古くからの文明が力強く新たな活力を生み出すことを願っている。



弁当のデザインの様子

自由の学風と強大な学術レベルの融合

北京語言大学学生代表

見学日時：2019年11月27日（水）12:55-20:20

見学場所：京都大学

見学概要



私たちはまず吉田国際交流会館において韓先生から京都大学に関する紹介を受けた。韓先生は長年京都大学に勤めていて、同大学について多くを知っている他、話しぶりもとてもユニークで、私たちは京都大学についておおよその理解を得ることができた。その中で最も印象的でまた韓先生から最も言及があったのは、京都大学の「自由の学風」であった。

その後、ボランティア学生が私たちを連れキャンパスを案内してくれた。私たちが訪れたのは丁度京都が紅葉を迎える時期で、キャンパス内の銀杏やカエデの木もそれぞれ黄色や赤色に染まっていた。そしてキャンパスの見学により京都大学の自由の校風についてさらに具体的な印象が得られた。吉田寮や学内の掲示板等には京都大学の「自由」への一貫性が示されていた。またその後見学した校史館や京都大学の歴史上の様々な学内運動は改めて同大学の自由と学校自治への一貫性を証明するものであった。そして校門近くにある広場のような場所では、さらに伝統芸能のパフォーマンスの練習をしている人の姿を見かけた。

その後は多くの日本人学生と様々なテーマに関するグループ討論を行い、皆は積極的にそれぞれの意見を出し合い、結論をまとめ、発表を行った。

そして懇親会では、皆は学内のレストランで食事をしながら自由に交流を楽しんだ。

なぜですか？

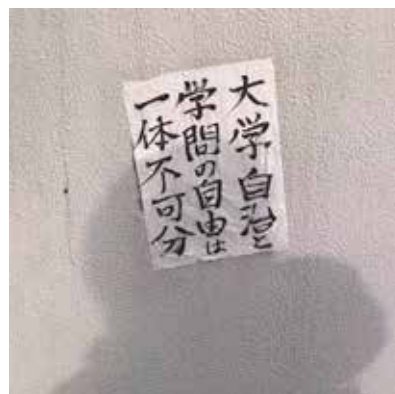


問：京都大学には図書館は何ヵ所あるのか？

答：この小さな建物は京都大学の図書館である。初めてみた時は、これほど大きな京都大学の図書館が北京語言大学の図書館とほぼ同じ大きさであることに驚いたが、その後引率の学生に尋ねたところ、京都大学には図書館が 11 ヲ所あるとのことであった。

問：京都大学の学生はどういった場で自分の意見を発信することができるのか？

答：通常、中国の学生が自分の意見や提案を発信したい場合は直接教授の下を訪れるか或いはメールを送るしかない。だが、京都大学では学校の掲示板或いはキャンパス内の道沿いにおいて発信することができ、さらに学生らはどのような意見の発信も許されている。



問：京都大学内に警察が入ることができないのはなぜか？

答：学校における言論の自由と教育研究環境が政府の干渉を受けないようにするために、警察は京都大学内には入ることができない。かつて学生が校門近くで私服警官を捕まえたといった出来事もあった。この事を知った私は少し可笑しく感じたと同時にまた本当に驚かされた。その後引率の学生に、警察が入ることができないとすれば、学内でもし凶悪事件が発生した際にはどのように対処するのかと尋ねたところ、機動隊が対処をするとのことであった。

感想

韓先生が紹介の中で述べていた通り、京都大学は教授と学生をとっても尊重する姿勢を持った大学であった。京都大学は教授や学生が自身の興味に基づき研究を行うことをサポートしており、研究に対して制限を設けていない。この点についてはキャンパス見学やその後の学生との交流の際に強く感じる事ができた。正にこうした点が理由となり、私たちと交流をした学生はバリエーションに富み、皆が自身の考えを持ち、自分の好きな道を歩んでいたのかもしれない。京都大学が日本で最多のノーベル賞受賞者を輩出している理由について、私は同大学が学生や教授の興味を尊重し、皆に自由な研究の環境を提供しているからだと思った。

ソニー：温かみのある新テクノロジーを創造する

中国伝媒大学学生代表

見学日時：2019年11月29日（金）10:20-12:05

見学場所：ソニー株式会社

見学概要

訪日団の今回のソニー訪問における活動内容は、主に挨拶とプレゼンテーション、製品の没入型体験、質疑応答の三つであった。

まず初めに、ソニー株式会社広報・CSR部の今田真実シニアゼネラルマネジャーと第25回訪日団の程海波団長から挨拶があった。その後、人事センターの馬氏から同社の概況についてプレゼンテーションがあり、私たちは同社が家庭用・プロ用のオーディオビジュアル、ゲーム、通信・エンタテインメント、中核部品及び情報技術等の分野で世界をリードしていることを知った。

次に、団員らは三つのグループに分かれ陳列館に向かい、製品の没入型操作体験をした。8Kディスプレイ、PlayStation VRでの潜水体験、XPERIAによる映画レベルの撮影機能、360度のサラウンド音響、高解像度音源がもたらす素晴らしい聴覚体験の他、さらに自律型エンタテインメントロボットのaibo等の「先端技術」はとても新鮮で、「クリエイティビティとテクノロジーの力で、世界を感動で満たす」というソニーの目標を示すものであった。

そして、ソニーは私たちに知られざる一面を見せてくれた。ソニーの70周年の記念映像では、同社の製品が各年代に登場することで各年代における人々とソニーの美しい記憶を表現しており、とても感動的であった。その後は馬氏からソニーでの勤務における感想や企業の雰囲気等について紹介があった。



立派な本社ビル



馬氏によるプレゼンテーションの様子

なぜですか？

問：ソニーが多額の資金を投じて自律型エンタテインメントロボットのaiboを作った意味は？

答：私たちが生産しているのは生活における必需品ではないが、人々に感動を提供したいと願っている。aiboは1990年代にはすでに雛型が完成しており、当時において世界をリードする技術であった。ソニーの昔からのスタッフは現在でもaiboに強い思い入れを持っている。

問：将来的に家庭用とプロ用のどちらにより大きな比重を置くのか？

答：ソニーは幅広い市場を必要としており、家庭用製品が占める比重も大きいですが、プロ用設備については放送局等との直接的な提携により製品のカスタマイズを行う。

問：デジタル映像分野において高い実力を有するライバル企業（キヤノン、ニコン等）に対するソニーの切り札は？
答：ソニーには自身の中核技術である世界一流のセンサーがあり、デジタル一眼カメラに搭載している。他のカメラメーカーの中にはソニーが生産したセンサーを使用しているところもある。

感想

私たちはまだ若いソニーという企業の強大さに驚かされた。ゲーム機の PlayStation4 の販売台数が 9000 万台を突破する、ソニー・ピクチャーズエンタテインメントが製作に携わった映画が累計 3500 本に達する、フォーチュングローバル 500 において 5 年以上アジアのトップ 5 に位置するなど、これらの「天文学的数字」の背後にはソニーの精神である「イノベーション」が常に存在する。ソニーは画期的な製品を次々に生み出し幅広く市場を獲得している。馬氏からは「2018 年度、ソニーは過去最高の営業利益を達成した。」とのお話があった。PlayStation5 の発売が迫る 2020 年において業績はさらに伸びていくであろうか？

私たちは、このソニーというテクノロジー企業を敬いの気持ちをもって訪れた。私たちは沢山の収穫を得た他、幻想的また現実的な製品に驚かされたが、それ以上に思いがけなかったのは同社の知られざる思いやりであった。正に企業のパーパスである「Fill the world with emotion ,through the power of creativity and technology. (クリエイティビティとテクノロジーの力で、世界を感動で満たす。)」の如く、製品を作る上での出発点は人のために、思いやりを込め、世界を感動させることである。市場の強い誘惑の下、ソニーは自身の初心を忘れることなく、テクノロジーとヒューマンケアを融合することで、人々のテクノロジーへの「冷たい」といったこれまでの印象を打ち破っている。

真に社会と運命を共にする世界の一流企業

外交学院学生代表

見学日時：2019年11月29日（金）15:30-19:30

見学場所：三菱商事株式会社

見学概要

三菱商事での活動内容は、主に説明会と懇親会の二つであった。

説明会ではまず三菱商事の西浦完司代表取締役と中国大学生訪日団の程海波団長からそれぞれ挨拶があった。その後、地域統括部の池田統括マネージャーより三菱商事の発展の歴史と三菱グループの三綱領である「所期奉公、处事光明、立業貿易」の精神についての紹介があった。その中で池田マネージャーは、三菱商事の各時期における形態の変化や機能の改善によるビジネス環境の変化への対応と逆境の克服に関して、時間を軸とした解説をされた。さらに三菱商事の業態変革事例の解説においては、金属資源事業、食品流通事業、自動車事業の状況について重点的な紹介があった。次いで人事部の中西室長から主に三菱商事内部における女性従業員の状況（従業員の多様性）についての解説があった。そして最後に、サステナビリティ・CSR部の浅野リーダーより三菱商事のサステナビリティに関する取り組みについての紹介があった。

懇親会では、平井康光中国総代表より挨拶と乾杯の音頭があり、その後団員らは三菱商事のスタッフと踏み込んだ交流を行った。懇親会ではまた三つの大学の団員から感想の発表があり、最後に程海波団長からの挨拶で訪日団の三菱商事での見学は幕を閉じた。

質疑応答

問：三菱商事はどのように女性の職場進出を促進しているのか？

答：夫がお金を稼ぎ家計を支え、妻が家事を担当するのが大多数の日本の家庭における役割分担であるが、こうした社会的現状に対して三菱商事は率先して女性の職場進出を推奨しており、女性従業員の妊娠から出産後の子どもの就学まで細やかで全面的な一連の支援措置を打ち出している。こうしたヒューマンケアと勇気はとても印象的なものである。

問：三菱商事は社会的責任の面でどういった取り組みをしているのか？

答：三菱商事は1973年から社会環境室を設置し、「共生社会の実現」、「次世代の育成」、「環境保護」の三大テーマをめぐり社会貢献活動を行っている。災害支援（東日本大震災など）のみならず、母子家庭を対象とした「自然教室」、芸術家を志す人用に作品の公開販売を行い奨学金とする活動、熱帯林の再生、身体が不自由な人へのサポートといった公益事業により、社会に対して企業としての貢献を続けている。

感想

まず人材育成の面で私たちは三菱商事には人材に対する研修プロジェクトが存在することを知った。この研修は様々な需要を踏まえ各方面における能力の育成を行うもので、懇親会で三菱商事のスタッフらと交流した際、彼らはいずれも一定期間中国での研修を行っていたことが分かったが、これもそうした研修の一環であった。こうした学習は従業員に一定レベルの中国語をマスターさせると同時に、中国の国情への理解による会社と中国との提携への関わりを容易にし、さらに日中友好交流活動において自身の率直な感想を述べ、さらに中国側との交流によって印象の中の中国と現在の中国との違いを知るなど、自身の中国への印象を積み重ねることを可能にする。こうした交流のプロセスは日中の友好交流を推し進める一つの原動力になると言える。

次に世界の一流企業である三菱商事の時代の流れへの順応を目的とした積極的な変革である。この点についてはまず三菱商事の歴史の各段階において行った業態の変革に示されている。例えば金属資源事業においては、当初は単純な輸入のみであったが、その後オイルショックにより市場が悪化し仲介機能が必要とされなくなったため、三菱商事は輸入に加えて関連の出資を行うとの戦略を始め、川上の「資源開発」分野に進出し、鉱山事業を共同経営し、資源開発における地位を確かなものとした。それと同時に三菱商事はグローバル貿易に狙いを定め、指揮拠点をシンガポールに移し、貿易の便利化と市場の拡大を実現した。またこうした積極的な変革はさらに三菱商事の「低炭素社会への移行」、「自然環境の保全」等の課題への取り組みにも示されており、「環境価値」を中期経営戦略における三つの価値の一つとして世界規模の環境保護の流れに順応した活動を続けている。



日本で最も長い歴史を有する金融グループ

北京語言大学学生代表

見学日時：2019年12月2日（月）9:30-11:00

見学場所：三菱UFJ銀行

見学概要

まず初めに三菱 UFJ 銀行経営企画部中国室の関謙次室長から歓迎の挨拶ならびに同銀行についての紹介があり、私たちは三菱 UFJ 銀行の沿革、海外市場、世界ランク及び中国市場との緊密な関係性等について理解を深めた。その後、程海波団長からの発言があり、その中では程団長自身の三菱 UFJ 銀行への認識や三菱 UFJ 銀行とのエピソードについての紹介があった。その後、国際業務部の周瑛、宋倩両氏から中国籍スタッフとしての三菱 UFJ 銀行での勤務状況の他、貴重な体験談の紹介があり、これらの内容は団員らの今後に役立つものであった。その後、周瑛、宋倩両氏との質疑応答となった。団員らは、留学生が日本で銀行手続きをする際の問題や語学を専攻する学生はどうすれば分野の異なる銀行に入社できるのかといった生活に即した質問の他、ブロックチェーンの問題及び三菱 UFJ 銀行の海外市場に関する問題等様々な質問をし、丁寧な回答を頂いた。



会議室内

なぜですか？

程海波団長が 30 年前に作製した三菱銀行のキャッシュカードは現在でも三菱 UFJ 銀行において使用可能である。

三菱 UFJ 銀行からは各団員にタオルが配られた。見学を終えた頃は丁度強い雨が降っていたため、皆はタオルを活用することができた。これには同銀行の先見性の高さを感じた。



感想

日本で最も長い歴史を有する金融グループである三菱 UFJ フィナンシャル・グループは世界全体でも高い地位にある。金融は国家のライフラインであり、三菱 UFJ フィナンシャル・グループ（MUFG）はこの重責を担っている。そして日本全体の経済に対する貢献のみならず、環境保護、災害予防等様々な分野の社会プロジェクトにも積極的に携わっている。また、日本政府は比較的慎重な姿勢であることから、国の経済の安定的で制御可能な状態の維持のために、銀行の発展に対して様々な障害を設けているが、そうした中で MUFG は自らの責任感の下、常に己を鍛え困難を克服し、そして進歩を続けている。

時空を超えた日中友好

中国伝媒大学学生代表

見学日時：2019年12月2日（月）12:00-13:30

見学場所：日比谷松本楼

見学概要

12月2日の正午、訪日団一行は日比谷松本楼に到着し、スタッフの案内の下で宋慶齡女史が使用していたピアノや日中交流のエピソードに関する史料等を見学した。その後、二階の宴会場で昼食となり、食事の後は梅屋庄吉氏の曾孫にあたる方から梅屋庄吉氏と孫中山氏の海や時間を越えた友情のエピソードの紹介があり、私たちは遙か昔の重要な、また発展を続ける日中の友好関係について思いを馳せ、また思いを巡らせた。



宋慶齡女史が使用していたピアノ



日中友好に関する史料



二階の宴会場からの景色



松本楼のプレート

なぜですか？

問：松本楼には日中の友好交流に関するどのようなエピソードがあるのか？

答：松本楼にちなんだ最も感動的なエピソードは、孫中山氏と梅屋庄吉氏に関するものである。孫中山氏と志や理想を同じくした梅屋庄吉氏は孫中山氏の革命事業を全力で支援し、孫中山氏の死去後は自身の財産を使い孫中山氏の銅像を作り中国へ贈呈し、孫中山氏を追想した。両氏はかつて松本楼を訪れており、宋慶齡女史が使用していたピアノもまたここに陳列されるなど、松本楼は当時の感動的な友情の舞台であった。また、2008年には当時の胡錦濤国家主席が当時の福田康夫首相と共にこれらの史料を閲覧するなど日中の友好関係の発展を共に推し進めた。松本楼は日中の友好交流と深い友情における文化的ランドマークとなっている。

問：梅屋庄吉氏はなぜ全財産を使い中国の革命事業を支援したのか？

答：梅屋庄吉氏の曾孫の方からこの問題に対する回答があった。日中両国は長い歴史を有していると共に日本文化は中国の影響を強く受けており、両国は実の兄弟に例えられ、日本は中国に対して敬いや親しみの気持ちを持っている。そして近代において中国の国力が低下した際、日本の有志は兄弟の心を示すため中国を救う決心をした。そうした中、梅屋庄吉氏は孫中山氏と兄弟のように意気投合し、二重の「兄弟の心」により「君は兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す」との感動的な革命の友情が生まれたのである。

問：孫中山氏と宋慶齡女史の馴れ初めは？

答：孫中山氏と宋慶齡女史の愛情は梅屋庄吉氏一家による紹介と仲立ちから始まった。梅屋庄吉氏とその妻のトク夫人は孫中山氏の革命事業の支援以外に、孫中山氏と宋慶齡女史の仲人の役割も担った。正に梅屋夫妻の仲立ちにより革命時期の愛情が育まれ、人々の賞賛を受ける模範的な愛情となったのである。

問：一つの感情の消費期限はどれ程の長さか？

答：孫中山氏と梅屋庄吉氏の友情は両氏の別れや死去によって止まることはない。両氏の生前においてはその友情は時間や距離といったものに負けることはなく、両氏の死後においては当時の友情はその家族によって受け継がれている。今日においても両氏の子孫は交流を続けており、当時の友情は距離や時間の垣根を越え、今後も受け継がれていく。

感想

真に心のこもった思いというのは常に人を感動させる力を持つ。この場合の感動は当事者自身の心情が原因のものではなく、時間が経過しても事情を知る全ての人を感動させることが原因のものである。梅屋庄吉、孫中山両氏の友情のエピソードの最も感動的なところは、それが時間を越えて現在にも受け継がれている点である。日中両国にはかつて、そして現在においてもこうした感動的な友情が存在する。孫中山氏と梅屋庄吉氏の友情は二人が意気投合したことそして二人の共通の認識がきっかけとなっている。日中両国には多くの共通点が存在し、それら共通点の一つひとつが友情を育んでいる。確かに、日中両国には戦争も存在し、民衆の間には隔たりが存在したこともあったが、一衣帯水の両国間には依然として多くの共通点や友好交流のエピソードが存在する。今回の交流においても日中双方の友好交流への期待や小異を残して大同を求める姿勢が感じられるなど、両国の友好交流の先行きは明るいと言える。日本の大学生やホストファミリーとの交流においてもまた多くの共通点を発見したことで友情が生まれた。国の交わりは民の親しきにある。両国の友情は集う中で発展を続け、時間が経つにつれより活力を増していくと確信している。

日本での「帰宅」の旅

外交学院学生代表

見学日時：2019年12月2日（月） 14:05-15:35

見学場所：中華人民共和国駐日本国大使館

見学概要

12月2日の午後、訪日団一行は松本楼での昼食を終えた後、中華人民共和国駐日本国大使館へと向かい、政治部の聶佳参事官の出迎えを受けた。大使館での活動内容は、記念撮影、聶佳参事官からの歓迎の挨拶、程海波団長からの挨拶、各学校の代表学生からの本活動における感想等の紹介、質疑応答などで、全体を通して賑やかな雰囲気の中で行われた。

なぜですか？

(1) 大使館への訪問において私たちはユニークな事実について知った。それは外国に駐在する大使館の所在地は実のところ自国の領土に属するという点で、つまり私たちは暫しの帰国をしたということである。「同郷の皆さん」のおもてなしに私たちの心はとても温かくなり、皆はこの場所においてさながら自分の居場所を見つけたかのように、この数日間の日本での体験や感想について自国語で楽しく交流をしていた。



(2) 各学校の代表学生の発言内容を通じて私たちは、皆専攻は異なるが、いずれも中日友好事業に自分なりの貢献をすることを望んでいることを知った。例えば中国伝媒大学の学生はショートフィルムやショートムービーといった方式で中国について外国へ紹介する、北京語言大学の学生は翻訳や海外の友人との直接交流といった方式で彼らの中国への理解を深めることを望んでいた。学生らのこうした抱負について知った私は、目標実現のために今後努力を続ける自信と決心がより強まった。

感想

日本の人々の中国への理解の度合は概ね中国の人々の日本への理解の度合には及ばないが、それには多方面の原因が存在する。例えば、近年中国の人々は海外旅行によって世界を知ることを好む傾向にあるが、日本の人々の場合は海外旅行に熱中する時期はすでに過ぎており、国内に居ることを好む傾向にある。それ以外にも中国と外国のウェブサイトとの切り離しにより、自国文化の速やかなまた便利な海外への発信ができない等である。こうした局面を変え、より多くの日本の人々が中国への興味を持ち、そして中国を理解するようになるためには、多方面の協力が必要となる。そしてその中でも非常に重要なのは民間外交である。日本語を専攻する私たちとしてできるのは、学んだ日本語をベースとして如何に中国を紹介するかを考えることである。このためには私たち自身が中国国内の様々な面について深い理解と認識を持ち、さらに日本の人々との触れ合いの機会を活かし、自信を持って流暢な言葉で中国の新たな時代について伝え、また紹介することが求められ、これはまた新たな時代の中国外交の観念とも一致するものである。この点については正に聶佳参事官から、中日友好への貢献手段は多種多様であり、皆はそれぞれの専門知識を活かして異なる面から努力をすれば良いため、皆は中日友好事業を自身の専門業務としなければならないというわけではないとお話があった。

大使館での1時間半はわずかな時間ではあったものの、他の活動とは大きく異なり挨拶や水臭さはほぼなく、皆は

この1時間半において大いに語り合うことができた。また皆は日本の大学生と香港問題や高速鉄道のオリジナリティ問題について討論した際の感想等、鋭い問題についても討論を行い、聶佳参事官からもまた自身の業務経験を踏まえた回答を頂いた。現代の中国の青年である私たちにとって最も重要なのは、問題に対してははっきりとした認識と正しい理解を持つと同時に、私たちの姿を通じて中日交流、ひいてはすべての対外交流のプロセスにおいて真実の、また完全な中国を示すことである。私たちは大きな責任を担っており、大使館は常に海外における私たちの確かな後ろ盾そして温かな拠り所である。



違いと理解

北京師範大学学生代表

見学日時：2019年12月2日（月） 16:15-19:45

見学場所：早稲田大学

見学概要

今回の日本訪問では、日本の各有名企業の見学以外にも、二つの有名大学の学生との交流もあり、その一つは京都大学で、もう一つは早稲田大学であった。

早稲田大学のキャンパスは開放的であり、一般市民は自由にキャンパスに出入りすることができる。校風が自由な早稲田大学はまた多くの外国人留学生を受け入れており、キャンパス内の至る所で外国人の姿を見かけると同時に様々な国の言葉も耳にすることができた。早稲田大学のキャンパス自体もまた大きな魅力を有しており、講義棟は地形を利用して建てられ、建築スタイルはそれぞれ異なり、低い建物や高く聳える塔、さらには芝生や木々があちこちにあるなど、とても美しい環境であった。

早稲田大学は美しいキャンパスだけでなく、優秀な学生も有している。今回私たち中国大学生代表団と交流したのは早稲田大学政治経済学部各学生で、日本語と英語のグループ各4組ずつに分かれ、「卒業後のキャリアプラン」と「取り組んだ課外活動」の二つのテーマについて交流と討論を行い、その後各グループの中国人学生と日本人学生の代表者1名ずつが討論の成果を発表した。各テーマについて討論した時間こそ短かったものの、双方の学生とも非常に積極的に自身の意見を述べ、交流のプロセスにおいてもまた両国の学生間の違いに気付くなど、交流や発表全体を通じてとても有意義であった。各グループからの発表が終わった後、中国伝媒大学の江篠芋さんと北京師範大学の張琬怡さんがステージ上で快板（板を打ち拍子を取りながら歌う大衆芸能）そして相声（漫才）を披露した。早稲田大学の学生らは中国語を理解することはできなかったが、彼女たちの情感豊かなパフォーマンスは大きな喝采と拍手を受けていた。



討論会はこうして終わったが、双方の学生の交流はまだ終わることなく、その後私たちは早稲田大学の食堂で夕食を共にするなど「懇親会」を開催した。そこでは更なる交流を望む学生らが思う存分語り合っていた。そして懇親会の時間も半分を過ぎた頃、早稲田大学の温かいおもてなしへの感謝を伝えるため中国大学生代表団から一曲披露するとの提案が程団長からあり、私たちは「いつでも何度でも」の合唱をした。そして代表団の元気な歌声は早稲田大学の学生らにも伝わり、彼らもまた早稲田大学の校歌を披露した。今回の早稲田大学への訪問は途切れることなく続く歌声の中で幕を閉じた。

なぜですか？

問：日本と中国の学生の卒業後のキャリアプランにおける違いは？

答：両国の学生の最も大きな違いは、大学卒業後における就職及び大学院進学への選択にある。中国では労働力が供給過剰の状態であるため就職活動の情勢も厳しく、学歴の高低は企業が人材を募集する上での重要な基準の一つとなっている。そのため、学歴が高いほど就職活動時に有利となり、中国の大学生の大多数はより良い就職先を見つけるために大学院進学を選択する。しかし日本では一般的に研究に従事したい人のみが大学卒業後に大学院で研鑽を積む。そのため、大学院に進む学生に対しては優れた従業員というよりも学術研究に打ち込む学者のイメージがあり、彼らは逆に就職活動時に学部生よりも不利になりがちである。

問：日本の大学生が学業よりも課外活動を重視するのはなぜか？

答：確かに中国の大学生と比べ、日本の大学生は課外活動をより重視している。こうした結果をもたらした直接的原因は、日本企業が人材を募集する上で学業成績をさほど重視していないことにある。早稲田大学の学生の話では、日本企業は面接時に応募者の表現力や組織力またチームワークにおける能力をより重視しているとのことであった。そして応募者のこれらの能力を反映するのは、面接時のグループ討論等の審査項目における実際のパフォーマンスや学生時代の課外活動の履歴である。こうした事実から、日本の大学生は学業成績よりも課外活動への幅広い参加を重視している。

感想

日本と中国の学生の課外活動における最も大きな違いはアルバイトをするかどうかという点であることが議論の際に分かった。中国では学業が忙しい、アルバイトの時給が安い、学費や家賃等の支出が大きくないといったことが理由で、アルバイトをする学生は非常に限られている。またアルバイトをする学生の中でも、その大多数は家庭教師のアルバイトをしている。対して日本では、大多数の学生がアルバイトを通じて自身の生活費を賄っており、コンビニや飲食店が主なアルバイト先となっている。普段、私たち中国の学生は学業が忙しいが、休暇期間においてはアルバイトを通じて自らを鍛える必要があると思う。アルバイトは、お金を稼ぐということ以上に一種の社会的実践であり、社会のルールを学び、自立した心を培い、良き師や良き友と知り合う上での重要な手段である。

他国の文化は一枚の鏡と同じであり、交流や比較を通じて私たちは自らをより良く知ることができる。今回、早稲田大学の学生との交流により、私たちは日本文化への理解を深めると同時に中国の文化についても改めて考えさせられた。

ホテルにおける持続可能な発展への取り組み

北京大学学生代表

見学日時：2019年12月3日（火） 9:30-11:00

見学場所：ホテルニューオータニ東京

見学概要

ホテルニューオータニにおいて私たちは生ごみの処理プロセスや浄水及び自家発電施設を見学した。

まず生ごみを肥料に変える施設だが、ここでは毎日ホテルの厨房やレストランから集められた3～4トンの生ごみに対して先ず乾燥処理を行い、質量の約8割を占める水分を取り除く。その後乾燥後のごみを発酵タンクに入れ微生物を利用した発酵処理を行う。そして最後に大きな固体となったごみを粉碎し顆粒状の肥料とする。これらの肥料は契約農家の栽培用に提供され、それらの農家が作った野菜などは改めてホテルが仕入れる。これにより野菜－ごみ－肥料－野菜といった持続的なサイクルを形成している。



処理後の肥料について紹介するスタッフ

次いで私たちは循環浄水施設を見学した。ホテルニューオータニでは厨房におい

て野菜や魚などの洗浄後の廃水（1日約20トン）を集め、それらの廃水を攪拌池においてバイオ処理した後、沈殿池において水に溶けない顆粒物を沈殿させ、最後に濾過を行うことで再利用可能な「中水」とし、トイレの洗浄用などに使用している。

その他、ホテルニューオータニでは処理後の浄水を、屋上緑化等の灌水として使用している。

最後に、私たちは自家発電設備を見学した。ホテルニューオータニでは合計3台のガスタービン発電機（出力各1500kW）によりホテルにおける30%の電力消費を賄っている。また発電における燃料は天然ガスで、摂氏600度の高温蒸気を発生させるが、この熱は同時にホテル内部の暖房供給に活用されるなど、エネルギーの効率的利用を実現している。

なぜですか？

問：ホテルニューオータニにおける毎月の発電量は？

答：住宅面積100㎡の四大家族23000世帯分の毎月の電力消費量に相当する。ホテルニューオータニの発電設備は、地震や他の突発事件の際のホテルの電力消費を賄うことが可能であり、事前の予防措置をとっていると言える。

感想

ホテルニューオータニにおける持続可能な発展への取り組みは私たちに多くの啓発をもたらした。従来の観念では、ホテルはビジネス企業であり営利が最優先の目的でなければならなかったが、ホテルニューオータニにおける生ごみや廃水の循環利用及び自家発電への取り組みは、直接的な利益以外を求めるものである。施設の管理スタッフを通じて私たちは、これらのごみ処理や浄水のシステムの維持のためにホテルは多くの人力と物資を投入していることを知ったが、これらはホテルの利益をより犠牲にするものである。そしてこれらの循環処理システムに

ついては、国や社会が強制的に導入を求めたものではなく、完全にホテルが自発的に導入したものである。東京都内のすべてのホテルの中で、これほどの規模のごみ処理施設を持つのはホテルニューオータニのみである。

こうした他に先んじる意識、人類から地球レベルでの発展の理念は私たちにとって非常に印象的であった。もしこうした持続可能な発展の理念が消費者やすべての業界における共通認識となれば、ますます多くの資源が節約され、社会全体もまた良い方向に向かうであろう。その先駆者であるホテルニューオータニは、中国の企業が学ぶべき存在である。



ホテルニューオータニ内部の景観

学生たちの感想文から

学生たちは毎晩、一日のスケジュールを終えてから日記形式の感想文を書き、第 25 回訪日の記録とした。以下、その一部を紹介する。

日 付：11月26日（火）【1日目】

大学名：北京大学

氏 名：張力丹

今日は訪日初日、飛行機が雲を突き抜け広々とした海原が視界に入ったその時、私は初めて異国の地を訪れたという実感が湧いた。雨が降ったばかりの曇り空の下、私たちは日本航空の整備工場を訪れた。そして工場見学の前に私たちはまず日本航空のスカイ・ミュージアムにおいて羽田空港の概況や日本航空の発展の歩みについて理解を深め、さらにシミュレーターによる飛行機操縦を体験した。

その後整備工場に足を踏み入れると、まず見えたのは沢山の足場に囲まれた飛行機の機体であった。スタッフの紹介によると、足場を組むことで機体への出入りや様々な場所でのメンテナンス、さらには客室頂部の WiFi 装置の検査がしやすくなるとのことであった。整備工場内はとても広く、沢山の足場があっても狭苦しさは感じられなかった。その後私たちは第二工場を訪れたが、そこには整備待ちの飛行機が 3 機停泊していて、さらに駐機場に通じるゲートがあった。私は飛行機の真下に立って初めてその大きさと、整備スタッフの仕事の大変さを感じることができた。そしてゲートからは飛行機が離着陸する滑走路を目にすることができた。羽田空港は貨物取扱量が非常に大きく、2, 3 分に 1 機の割合で飛行機が着陸する。私たちはその中で中国の航空会社の飛行機も目にした。

日本航空の整備工場の見学を終えた後、私たちは飛行機で大阪に向かった。伊丹空港は規模こそさほどでもなかったがデザイン性がとても高く、温かみを感じる照明の他、ソファエリアがあるなど、中国国内の空港に比べより庶民的な感じがした。そしてエスカレーターを乗り継ぎ、私たちは旅客ターミナルエリアを離れた。

夕食は、1970 年の大阪万博会場近くのホテルでのビュッフェであった。ホテルのロビーはとても静かで皆は声を抑えておしゃべりをした。また東京から大阪に向かう機内でも大声で話をする人はほとんどいなかったが、これは日本人が他人に迷惑をかけることを嫌う民族であることと関係しているのかもしれない。

今日一日を通じて、スタッフの皆さんは私たちにとっても友好的でまた親切であった。整備工場では、スタッフの皆さんが笑顔で会釈をしてくれた他、私たちがその場を離れる際には私たちのバスが視界から消えるまで手を振ってお別れをしてくれた。

日 付：11月26日（火）【1日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：郭蓓蓓

日本航空の飛行機に乗って 3 時間、中国の首都北京から日本の首都東京に到着した。この 3 時間のフライトでは、搭乗から到着まで、日本航空のサービスの細やかさと素早さ、規則的な処理、フライトの快適さが融合する様子を体験することができた。

東京から大阪に移動するまでの数時間の間、私たちは日本航空の整備工場を見学することができた。そこでは日本航空のスタッフから温かい歓迎を受け、さらに空港の敷地面積、規模や設備、旅客輸送量等を含む基本状況の紹介の他、ビデオ形式での各業務スタッフの職務や業務内容等の紹介があった。そして 40 分間の休憩時間で私たちは工場内部の展示エリアを自由に見学した。フライトアテンダントの制服を試着したり各展示エリアをじっくりと見学したりすることはできなかったが、それでも展示エリア内の文字や展示品からは日本航空の発展の歩みを知ることができ、多くの部分でとても有意義に感じられた。例えば、日本航空はいかにして国営企業から民間企業に発展していっ

たのか、航空という交通方式はどのように一部の人が大衆向けに普及していったのか、さらに日本の航空産業全体の盛衰、日本航空の「鶴丸」マークの意味等について、個人的に多くの収穫が得られた。展示エリアではまた日本航空の関連グッズなどが展示されていて、それらはとても手が込んでいて収集的価値が感じられるものであった。

そして最も印象深かったのは整備工場現場の見学で、特に巨大な空間に入った瞬間はやはりとても衝撃的であった。そこではスタッフから飛行機の整備は年数ではなく飛行時間により行い、且つ1回のメンテナンスの時間やその費用も非常に高額であるといった飛行機のメンテナンスに関する知識の紹介があった。また倉庫の巨大なゲート前では飛行機の離着陸の全プロセスを目にすることができ、とても忘れられない体験となった。

日 付：11月26日（火）【1日目】

大学名：中国伝媒大学

氏 名：袁嘉憶

今日の最初の目的地は羽田空港で、その次は大阪、そして最後は京都であった。一日通じての移動は疲れも感じたがそれでも充実していて、知らぬ間に私たちは一首都・二古都を訪れていた。だが何かしらの観光地を訪れたわけではなく、飛行機やバスの中でガイドの中島さんの解説を聞いただけである。移動の疲れと眠気の中、窓を通して日本という国の気候やリズム、日光と夜景を感じていた。

静かで秩序的というのが私のこの国への第一印象である。羽田空港では、チェックインやセキュリティのスタッフそして乗客は皆静かに微笑み、静かに食事をし、静かに待っていて騒々しい大声で話をする人はなく、その雰囲気には「声を出すのも憚られてしまう」が、正にこうした静けさが人を安心させ、秩序をもたらしているのである。忙しいながらも整然としている、厳しいながらもシビアではないというのが、私が感じたこの国の雰囲気である。

東京から大阪への乗り換えの間、私たちは日本航空の整備工場を見学し、飛行機の1回の離陸はどれほどのスタッフの協力により行われているかについて理解を深めた他、整備工場の壮観さを体感した。工場内では飛行機のメンテナンスの際の大きな物音を間近で耳にした他、飛行機の離着陸の様子を興奮しながら記録した。これらすべてに私たちは驚かされた。そして見学を終え整備工場を離れる際は、姿が見えなくなるまでお互いに手を振ってお別れをした。

夕食は大阪でとったが、そこはかつて1970年の万国博覧会の開催地で、今では現代的な様々な建物が密集していた。ここでの食事はとても素晴らしく、日本の食事の上品さに私たちは舌を巻くばかりであった。

初日の行動のほとんどは「飛行機」に関係していた。だが、「一花一世界（一輪の花でも一つの世界になる）」という言葉があるように、日本航空の飛行機への搭乗から整備工場の見学まで、飛行機を通じて見える日本国民の素養こそが私の日本に対する真の第一印象であった。

日 付：11月27日（水）【2日目】

大学名：北京大学

氏 名：姜姍汝

この日の午前、私たちは京都にあるPanasonic Design Kyotoを訪れた。ここでの活動は大きく分けてデザインされた商品の見学とデザイン体験の2つであった。展示品の見学では茶筒からインスピレーションを得た防音スピーカーや自然な微風を生み出す扇風機、そして樹脂を原材料とした吊り天井等を目にした。これらの商品はスタイルが美しく、生活からそのほとんどのインスピレーションを得ていて、実用性とデザインの美しさを巧みに融合させていた。そして団員らの「弁当」のデザインのコーナーでは、私たちは5つのグループに分かれ、それぞれ特徴的な弁当のデザイン5つを完成させた。パナソニックのデザイン担当スタッフからはデザイン業務の基本的な流れについての紹介があり、その中では「簡単に否定しない」、「使用者の視点に立つ」、「具体化をする」等の原則が示されていた。

これには団員らも大きな刺激を受けた。これまで自分たちが受けてきた教育方式を振り返ると、革新性は常に取り上げられてきたが、その実用的また効果的な実践方法がなかったのではないか。私たちはパナソニックの「設計工房」式の革新モデルを学び取り入れるべきではないかと感じた。

午後、私たちは著名な京都大学を訪れた。京都大学と私の通う北京大学はそれぞれ 1897 年と 1898 年に創立されていてほぼ同年齢の 100 歳を超える大学である。京都大学の見学では、両大学に共通する部分と異なる部分を感じられた。共通しているのは、両大学とも世界でも一流の教師と学生を抱え、世界に向けて次々と人材や学術的成果を提供している点で、異なるのは、京都大学は北京大学よりもリズムがゆったりとしている点である。北京大学では教授らは常に多忙を極め、効率的に学術的成果を生み出しているが、京都大学の教授らはじっくりと生涯をかけて一つの研究を行っている。それは教授らにとっては外界からのプレッシャーが和らぐものであり、それにより周囲に流されることなく自分独自の考えを持ち続けることができる。その他、私自身も多くの京都大学の学生と知り合ったが、彼らの授業のカリキュラムは私たちほど詰まってはおらず、試験勉強といったこともほとんどない。その一方彼らは私たちよりも多額の学費負担をしており、空いた時間のアルバイトも一般的である。両大学の違いに私は多くを考えさせられた。これから先、両国のより多くの学生が互いに交流できる機会が生まれることを願っている。

日 付：11月27日（水）【2日目】

大学名：中国伝媒大学

氏 名：鄭博航

朝はまずホテルで朝食をとったが、これは京都での初めての朝食であった。とても豪勢な食事だったが、中国と違うと思ったのは炊いたご飯と調味料を混ぜて食べるところで、一般的に中国国内では朝食にご飯はほとんど食べない。

朝食の後 Panasonic Design Kyoto へ向かった。印象深かったのはパナソニックが生み出したコンセプト商品は家電製品である以上に芸術品であるという点であった。日常の生活から始まり、茶を楽しむ、お酒を飲むといったことについてパナソニックは科学技術によりそれらをより便利にまた快適にしており、外観的にもこれらの商品のデザインはまた非常に優れていた。生活に必要な家電製品以外にもパナソニックは生活の質を高める製品を提供していた。心が落ち着いた時にだけ発光するライト、音楽をさざ波に変えることで聴覚を視覚に変える、これらはいずれもギャラリー内の芸術品のようであった。

またパナソニックではグループに分かれ弁当のデザインを体験した。その際私は台上でのプレゼンを行ったが、この日私はさらに京都大学でもプレゼンを行った。グループ内の日本人学生は日中関係における双方への印象や見解を討論のテーマに選んだが、これはとても大きくまた重いテーマであった。討論が終わりに近づいても私たち学生の視点からではこれらの問題への良い解決策は見つからなかったが、それでも私たちは互いに意思疎通をし、短い時間ながらも互いの見解について実際に知ることができた。

日 付：11月27日（水）【2日目】

大学名：中国伝媒大学

氏 名：袁嘉憶

この日の午前、私たちは Panasonic Design Kyoto を見学した。9 階のバルコニーから京都の街を見下ろすと、通勤する人々や車が絶え間なく続き、ドラッグストアの看板が色鮮やかで、京都タワーが遠くに聳え立っていた。そうした景色を高いところから見ていると視野が広がり心も広がった。パナソニックのデザイナーの多くもこうした景色を見て優れた作品を生み出しているのかもしれない。私たちはそうしたデザイナーによる展示品の一部に実際に触れることができた。密封性の優れた茶筒からヒントを得た、ふたを開けると音が聞こえ、閉じると音が消えるスピーカー；金銀の絹糸で作られ、触れる位置の違いにより異なる音が発するスピーカー；平衡に持った時にだけ光を発する香炉等、私た

ちはそれらの完成品を体験したが、その理念については推して知るべしである。これらの「芸術品」から私たちは現代と古典、芸術と技術の融合を見た。私たちはさらにワークショップに参加し、弁当のデザインを通じて1つのアイデアの発生から実物への応用そして生産ラインまでのプロセスを体験することができた。こうしたプロセスから私はデザインとは単純なものではなく、その背後にはユーザープロファイルの構築、基礎原理の運用そして製品に磨きをかけるための批判的思考が存在していることを知った。

午後、私たちは日本の著名学府である京都大学に向かった。大学の規模自体は特に大きいというわけではなかったが、その景観はとても素晴らしかった。キャンパス内ではたびたび自転車に乗った学生が寮や講義棟また図書館等を行き交う様子を目にした。京都大学の学生の案内の下、私たちは歴史展示室等キャンパス内各所を見学し、その後京都大学の学生を交えてグループ討論をした。私たちのテーマは「環境保護」で、京都大学の大学院生の指導の下、私たちは二酸化炭素排出量に関する日中両国の各次元における比較を行い、「中国有価責任」、「日本有価責任」及び「日中有価協力の可能性」について討論し、最後にアインシュタインも訪れたことがある講堂で討論結果の発表をした。京都大学の学生は人間性や言語的素養また学術的素養のいずれもとても優れていて、私たちは今回の討論を通じて友情を育むことができた。交流には両国の学生の相互理解を大きく促進する作用があり、たとえ一回のプレゼンテーションでも、率直に交流し、力を合わせれば、大きな成果が得られることを私は知ることができた。

日 付：11月27日（水）【2日目】

大学名： 外交学院

氏 名： 張炯琪

午前には Panasonic Design Kyoto の見学であった。多くの人と同様に私のパナソニックへの印象は従来の家電大手というものであったが、今日はパナソニックの別の一面、つまりデザインへの探求という一面を目にすることができた。

見学の際に印象深かったのは、作業部屋の配置と二つのデザイン商品であった。作業部屋に関しては、自由な討論ができるスペースや仕切りが付いた個人用の作業スペースがあり、その他には各作業チームの討論の様子が見える透明な会議室が複数あった。創意を求める企業には、その設計において必然的に「個人」と「グループ」の自由な切り替えと融合を考慮することが求められると思う。またデザイン的には「自然な風をもたらす扇風機」と「心の落ち着きを求めるランプ」が印象深かった。これらからは自然のそよ風を感じ、心が落ち着きまた雑念がなくなった。こうしたデザインは自然と人の心からインスピレーションを得ているものである。

その後は京都大学を訪れた。京都大学の建物は洗練されているというわけではないが、シンプルで年代が感じられた。私が参加した討論のテーマは日中両国の人々の人生観であった。価値観の違いについて皆は大いに討論をし、それぞれの意見を記録した。印象深かったのは、ある京都大学の学生の話の中で、日本に向かう機内で中国人がとてもうさかったが、帰国の際には疲れたのか一言も発していなかった。普段日本人は中国人の素養が比較的低いと思っているが、実のところそれは日本に向かうことへの一種の興奮の表れであり、日本の高度成長時代にも同様のケースが存在していた、というものであった。私はこの発言から賞賛すべき理解というものを感じた。

日 付：11月28日（木）【3日目】

大学名： 北京大学

氏 名： 王遠非

今日は訪日3日目である。昨日は Panasonic Design Kyoto と京都大学を見学したが、今日は企業や学校の見学はなく、朝私たちはバスで嵐山に向かい周恩来総理の記念碑を訪れた。ちょうど曇りで小雨も降るなど周総理の『雨中嵐山』の朗読にふさわしい天気だった。現在は紅葉の季節で、黒みがかった赤色の嵐山は小雨の中でひととき美しく、傍を流れる川は底が見えるほど透き通り、遠くの渡月橋が兩岸に架かる様は素晴らしい景色を作り上げていた。

その後、私たちは高台寺に向かい座禅と茶道を体験した。靴を脱ぎ禅室に入るとそこには赤い座布団が4列に並べられていた。禅師の指示に基づき私たちは座布団の上で胡坐をかき、背筋を伸ばし、丹田で呼吸をし、呼吸に神経を集中させた。これは一見簡単そうに見えるが、本当に神経を集中しようとする逆と脳内に様々な考えが浮かんでくる。だがこれは集中力を鍛える良い方法である。次いで茶道の体験となった。先生からは茶のたて方の紹介と茶を飲む際の手順の説明があった。亭主は茶碗を置く際、茶碗の正面を客に向けるため、客は茶を飲む前には必ず左手を茶碗の底に添え、右手で茶碗を半周回し茶碗の正面を亭主に向けなければならない、飲み終えた後は口が触れた部分を拭き取り、完了となる。茶道は中国発祥だが、日本において今日まで受け継がれている。日本の茶道を通じて中国の伝統文化を感じるというのはまた違った体験であった。

高台寺を離れた後、私たちは新幹線で小田原に移動し箱根に向かい箱根湯本温泉の天成園に宿泊した。夕食は豪華な会席料理で、懇親会では私は司会者の一人としてアナウンスを担当した。各学校とも出し物を披露したが、特に北京師範大学の学生達はとても張り切り歌を3曲披露した。懇親会終了後は温泉の時間となった。冬に野外で温泉に浸かるのは一種の贅沢であり、全身の筋肉がリラックスし、ここ数日の疲れを完全に取ることができた。

楽しい一日が終わり、私たちも気持ちを整えこれから先の日程に備えなければならない。明日はソニーと三菱商事を見学するのでとても楽しみにしている。

日 付：11月28日（木）【3日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：郭蓓蓓

あつという間に訪日も三日目となった。これまでの二日間の慌ただしい日程に比べ、この日は本当の意味での旅行そして観光となった。京都を訪れたからにはその風光や寺院には触れざるを得ない。周恩来総理はかつて1917年に学問のため日本に渡った。そして帰国の前に京都を訪れ、白話文で書かれた詩を四首残した。その後1979年、京都の日中友好団体や著名人による提唱の下「周恩来詩碑建立委員会」が設立され、そして同年4月16日に詩碑が完成した。そうした中、今回嵐山を訪れるということで私たちは周恩来総理の詩碑を見学した。詩碑は嵐山や大堰川に向かっており、様々な樹木に囲まれ、詩碑に刻まれた詩句の内容は周囲の風景と一致していてとても美しかった。

嵐山を離れた後、私たちは高台寺に向かい、浄音法師の指導の下で座禅と瞑想を体験し多くの収穫を得ることができた。茶道は中国発祥だが、中国では普及されず日本においてそれらが完全に受け継がれていた。私たち一行30人は茶のたて方から出し方さらに飲み方まで一連の流れを体験したが、それら各所作に対する要求の細かさや正確さ、技術的また経験的な要求の高さから、こうした細かな手順を完全に受け継いでいる民族はきっと真面目な民族だと感じたが実際その通りであり、機内の乗務員や空港のスタッフであれまたはホテルのスタッフやフロント、ひいては企業訪問時の対応・紹介担当者そして私たちの乗るバスの運転手であれ、皆いずれもこうした真面目また細やかで責任感のある姿勢で仕事に向き合っていた。

そして新幹線での2時間余りの移動の後、箱根湯本温泉の天成園を訪れ、会席料理を堪能し各大学による出し物を楽しんだ。その後は露天風呂に浸かり一日の疲れを癒し、元気一杯にそして気持ちも新たに新しい一日を迎えた。

日 付：11月28日（木）【3日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：張競文

今日の日程は最初の2日間とは異なり、主に日本文化を体験するというものであった。

午前はず京都の有名な観光地である嵐山に向かった。紅葉も終わりを迎える頃ではあったが、色とりどりの嵐山は依然として美しかった。赤、黄、深緑の葉が混ざり合う様子は遠くから見ると立体感があり、近くから嵐山の紅葉を

見ると中国のそれとは違い、小さくまた優美で、色もより赤く鮮やかながらも純朴な味わいがあった。嵐山の周辺の自然環境は非常に良く守られていた。鴨川からは川床に多くの鳥を見かけるようになり、水中でも大きなナマズを見かけた。しかし残念ながら散策の時間が短く嵐山の景色を完全に堪能することなく駐車場と周総理の詩碑を往復しただけであった。

次いで高台寺で座禅と茶道を体験した。不思議に感じたのは、日本の禅は古代中国から伝わったものをそのまま残しており、法師が身に着けているものも当時の様式の服装であったという点である。座禅においては心を落ち着かせ集中を高めるために香を焚く。しかし私は心を落ち着かせることができず、また我慢や集中力も足りず、呼吸に集中することも姿勢を維持することもできなかった。座禅終了後、法師からは現代の若者の集中力は次第に低下しているとお話があったが、私自身そうした問題があることを痛感し、早急に改めなければと思った。座禅の後は茶道を体験した。茶道については思っていたほど繁雑ではなく、茶道具の清めや茶をたてるといった一連の手順で最低でも30分はかかるのかと思っていたが実際には10分程度で済んだ。だがそれは披露したのが「茶をたてる」という内容だったからで、また茶道の紹介がしやすいように一部の手順を簡略化したからかもしれない。茶の味は中国の茶とはとても異なり抹茶の味であった。茶道は優雅、端正そして落ち着いたものであり、機会があれば私も学んでみたいと思った。

夜は箱根湯本温泉の天成園での温泉体験となった。浴衣を着るのは初めてではなかったが、浴衣の美しさには毎回感心してしまう。会席料理はとても豪勢で、1つの料理は少ないがすべてを合わせると食べきれないほどの量であった。各料理にはそれぞれ決まった食べ方があり、日本文化の細やかさに驚かされた。また食材や料理はいずれも素晴らしかったが、一部どうしても口に合わず食べられないものもあった。懇親会はとても楽しかった。その後は温泉に浸かり、露天風呂から山間の滝や神社が作り出す景色を堪能した。温泉の温度は温かく常にお湯が流れ込みとてもきれいだったが、長く浸かりすぎると胸が苦しくなった。

夜は畳の上で眠り、畳が日本人を「落ち着かせる」との気分を多少味わうことができた。

日 付：11月28日（木）【3日目】

大学名：中国伝媒大学

氏 名：任光建

“稍習夏音，惡倭名，更号日本，使者自言，因近日出，以為名。”「後稍夏音を習い、倭の名を惡み、更めて日本と号す。使者は自ら言う、日の出ずる所に近し、以て名と為す。」

—『新唐書・日本伝』

八大洲から「夏音を習う」そして「日本」に至るまで日本文化の血液中には多くの中華文明の遺伝子が存在している。「建築」、茶道、座禅これらの馴染み深い民族文化が東に伝わり装いを変えた。当初私は座禅体験については嫌であった（なぜ座ったまま時間を浪費するのか、別のことを体験するのはだめなのかと理解できなかった）が、実際に目を閉じて「修行」を始めた瞬間、スマホを持たず、何も考えず、じっと座り、呼吸を整え、心身のバランスを図ると一種の「自然に帰った」感覚が流れ込み、心が穏やかになり落ち着いた。以前チェックしていたブロガーが座禅を紹介しそれを勧めていた。私たちには高僧のような知恵はないが、少しの時間を利用して生活における知恵を見つけまたそれを感じても良いと思う。

茶道の体験においては、こんなに複雑にして疲れないのかと思った。紹介を受けた後、もし自分がお茶を飲むなら絶対にこのようにはしない。一杯のお湯に茶の粉末を入れてかき混ぜればそれでよく、そんなにのんびりしていられない。自由気ままが自分の人生哲学だと思っていたが、考え直してみると、茶道の広まりにもその理由が存在し、茶道の全体的なプロセスはゆったりとしていて慌て乱れることがなく、やすらかな気持ちで生活と向き合い、また生活を営むものである。

全体的に、日本の文化は静かであり、慌て乱れることなくやすらかな気持ちで生活を営み、生活に儀式感を加えることで生活を真の生活に変えている。

ところで嵐山の魚はお化けかと思うほど本当に大きかった。また天成園の温泉からは『千と千尋の神隠し』の気分が味わえた。山里、河の流れ、浴場に通じる橋、浴場ひいては後ろの山の魚もあり、それなら自分もハクになり、生活を営み、自らを癒そうと思った。

日 付： 11月29日（金）【4日目】

大学名： 北京師範大学

氏 名： 桂嘉雨

午前に訪れたソニー株式会社は極めて現代的であると同時に非常に壮観で衝撃を受けた。そして解説スタッフによるソニーの各製品への踏み込んだ紹介に伴い、8K ディスプレイ、センサー技術、スマホによる映画レベルの画像撮影、騒音抑制効果が高くまた随時外の音を聞くことができるイヤホン、12 台のスピーカーとメインボーカル、コーラスを分ける技術により臨場感の高い聴覚効果を作るなどこれらの体験はとても印象深く感じられた。まさにソニー株式会社の「We pioneer the future」との理念のように、彼らは未来の生活の方向性を決定付けており、最新技術により科学技術のさらなる可能性を私たちに示し続けている。馬女史による一中国人としての日本企業での勤務に関する紹介もまた非常に貴重で、私はその中から企業内部の団結力を強く感じた。

午後に見学した三菱商事は全体的なスタイルとしてソニーとは大きく異なっていた。三菱商事は実践的、シンプル、てきぱきとしていて同様に印象深かった。同社での紹介において最も興味深かったのは女性の活躍関連の取り組みだった。一女性として私は現在の就職環境において女性は様々な障害に直面していることを知っている。これは女性の就職率、職位のランクや経営陣の比率が男性よりはるかに低いことに影響するだけでなく、女性の恋愛・結婚や出産への観念に深く影響し、自発的ではない晩婚・高齢出産ひいては不婚・不出産をもたらしている。三菱商事が行っているのは、まさに女性職員の性別により生まれやすい様々な不安の解消であり、全面的なサポートにより安心して仕事に打ち込み、自身の価値を発揮できる環境を作っている。また女性職員に対して出産面での優遇措置をとると同時に男性の状況についても考慮し、男性の利益にも配慮するなどこうしたヒューマニズムや措置はとても印象深かった。

夜は社員の皆さんと心行くまで交流を楽しんだ。皆さんとても若く能力があり、実際にお話をした二人については、一人は京都大学出身、もう一人は東京大学出身で数ヵ国語に精通していた。私は日本での就職に関する疑問について彼らに尋ね、詳しい回答を頂くなど沢山の収穫を得ることができた。

日 付： 11月29日（金）【4日目】

大学名： 北京語言大学

氏 名： 税金妹

今日はソニーと三菱商事という日本を代表する企業を訪問し、多くの収穫を得ることができた。ソニーそして三菱商事のいずれも私の日本企業への従来の印象を打ち破るものであった。これまで私は、日本企業は改革やイノベーションを追求せず、規律を守るだけで、企業固有のモデルやしきたりによって運営していると思っていた。しかしソニーや三菱商事の見学を終えて、私は初めて企業の長年の運営を支えているのは企業の核心理念の伝承と継続そして時代の変化に対応した改革やイノベーションであることを知った。ソニーはこれまで常に科学技術により世界を感動させるとの企業理念により、当初の「Walkman」等の電子機器から映画等の様々な分野での事業において時代の変化に対応し絶えず新たな事業モデルを開拓してきた。三菱商事もまた時代の変化や経済のグローバル化といった世界的な現状に対応し、絶えず企業の構造転換を行い、次第に貿易、投資、金融、物流、情報等が一体となった多角的企業に発展していった。

その中で印象深かったのは三菱商事の福利制度と社会への貢献であった。世界的な大企業である三菱は積極的

に自らの社会的責任を担い、また会社の福利制度を整え、特に女性の權益の保護に注力しているが、これは中国国内の企業では珍しい。また同社は社会公益事業に積極的に参加をするなど、世界的大企業としての姿を私たちに示していた。

今日の日程はとても有意義で日本の世界的大企業が持つ変革の精神そして彼らすべての従業員の細やかで丁寧な勤務態度、さらには大企業として負うべき社会的責任等について体感することができた。

日 付：11月29日（金）【4日目】

大学名：中国伝媒大学

氏 名：江篠芋

最先端に行く日本企業：ソニー & 三菱

賑やかな東京の雰囲気は京都とは全く異なっていた。東京での初日はソニーと三菱商事を訪問したが、全体的に多くの収穫があり非常にためになった。

ソニー：メディア業界人にとっての「大手メーカー」であるソニーはその地位や評判は非常に高いが、私にとってかつて同社はマジックリアリズムによる産物であり、人類の前進を牽引する指針であった。だが見学の後私のそうした認識には変化が生まれ、感動的な70周年のPRビデオからは同社の温度が感じられた。そして世界中に広がる拠点からはグローバル化の高さを感じた。さらに馬女史に専門的な質問をして新たな知識を獲得すると共にソニーのこれまで以上に明るい先行きを垣間見ることができた。同社のイノベーションはこれからも人類を牽引すると確信している。

三菱商事：三菱グループ内の一企業としては非常に規模が大きく、国内外合わせて8万人もの従業員を抱えている。長い歴史を持つ三菱は流石に日本の「大財閥」であり、世界の貿易やグローバル化に大きな貢献をしている。私が最も感心したのは三菱の強大な生命力であり、絶えず経営体制を変え多くの企業を吸収し、事業分野を拡大し、多様化を許容するといった措置を通じて、特に女性従業員に対して優遇措置やヒューマニズムに富んだ配慮を提供していることは、同社が常に成長を続け、また多くの困難（1990年代のバブル経済、2008年の金融危機）を乗り越えられた原因だと思う。

私は三菱商事の女性従業員への優遇措置に特に関心があり、深刻な少子化の現在の日本においてこうした措置は雪中に炭を送るかの如く、女性の労働や育児の二重の負担を解消するものだと思う。人事部の中西佐和子女史や金属資源本部の福田圭馬氏への質問を通じて、私はこうした措置の実施の背景、経過、申請方法及び評価について知ることができた。将来的に中国においてもこうした取り組みが実施され、女性の昇進における「天井」や求職時の男女差別を打破することで、女性の労働や育児が整然と同時進行することを願っている。

日 付：11月29日（金）【4日目】

大学名：外交学院

氏 名：劉益琪

創意と科学技術の力で世界を感動させる、これはソニーの創業当初からのモットーである。日本の長寿企業は非常に多く、私は今回の企業訪問の機会を借りてその秘訣を探りたいと思っていた。私たちは今回直にXperiaシリーズのスマホ、360度サラウンドサウンド、VR技術等の「先端技術」に触れた。ソニー全体での生活レベルの向上や人々の生活における記念作りへの科学技術の応用という点については特に印象的であった。「私たちは、人々がソニーの製品を使う際、後になってこの製品自身のみならず、私と私の親や友人がソニーのイヤホンで当時この曲を聴いていた、ソニーのプレイステーションでこのゲームをしていたと思い返すことを願っている、これが私たちの追い求めるものである。」科学技術は本来人類と密接な関係にある事業に活用されるべきであり、私は人たるものとしてもこうあるべきで、広い心を持ち、必要な時には謙虚に他者と協力し、長所を取り入れ短所を補ってこそ先々までの発展を求め

ることができると思う。

午後私たちは三菱商事を訪れた。同社からの企業の発展の歩みについての紹介の際、印象深かったのは何度も登場した「SDGs」という言葉であった。企業の長期的発展は、名利のために手段を選ばない、自分の利益だけを考えるとといったことでは実現できるものではなく、長期的視野に立ち人類全体を思ってこそ新天地が開けるのである。その後陽が沈み三菱商事での懇親会が始まった。今回の懇親会には私たち訪日団一行の他、中国での勤務経験のある同社の多くの従業員も参加した。私たちは食事をしながら楽しく交流を図った。三菱商事の東アジア地区の代表は、彼らは社内で「中国通」を自称しているが、私たち中国人から見れば中国について何も知らないと感じるかもしれないと彼らをからかっていたが、少し話をして私は彼らが完全に中国通の呼び名に相応しいと感じた。私が湖南省出身だと言ったところ、彼らはすぐに「不怕辣、辣不怕（辛い物を好む、の意味）」といったことわざを口にできるほどであった。またその中の一名からは香港の騒乱に関してアメリカが法整備をしたことについて質問を受け、私は、これは中国の主権や内政に関わる事柄でありアメリカとは何の関係もないと単刀直入に答え、その人も頷きながら私の回答に理解を示してくれた。私は、すべての外国人が西側諸国の虚言に騙されるわけではなく、特に情報が溢れる現代においては、自ら考え、立場をはっきりとさせることはとても得難いことだと思っている。

日 付：11月30日（土）【5日目】

大学名：北京師範大学

氏 名：肖瑾

今日はホームステイの日である。多少緊張しながらロビーでホストファミリーからの迎えを待っていたが、団員達が次々と出発していくのを見ていると私も次第に焦りを感じ始めた。それから間もなくして私のホストファミリーの三隈さんが迎えに来てくれた。資料では三隈さんと奥さんには2歳と生まれたばかりの2人の娘さんがいるとのことであった。私たちはその後車で中央区の三隈さん宅に向かった。到着すると、三隈さんの奥さんと娘さんが私たちを迎えてくれた。その後の自己紹介で奥さんの名前は順子さんだと知った。順子さんが昼食の支度をしている間、私は三隈さんや娘さんとリビングでおしゃべりしたり遊んだりした。上の娘さんはちょうど元気いっぱいでも可愛い年頃で、何に対しても好奇心や元気に満ち溢れていた。この点については中国の子どもと同じであった。昼食はちらし寿司とナスやレンコン、ピーマン、大根などで作った野菜料理であった。そして食後には都内観光に向かった。

東京はいつでも人が多く、私たちが浅草寺に向かった際も周辺には沢山の観光客がいたが、それは日本国内のみならず、外国からの観光客も沢山いて、浅草寺の散策では様々な国の言葉が聴こえてきた。浅草寺でお参りをした後はおみくじを引き、私は「吉」を引き当てた。浅草寺には多くの食べ物が売っていて、私たちはさつまいもとカレーパンを買った。そこでさらに私は親戚や友人へのプレゼントを買った。

次いで秋葉原に向かった。三隈さん夫婦はまた夕食の準備を始めたが、それはすき焼きだった。三隈さんは私に日本料理を味わってもらうためにわざわざすき焼きにしてくれたようだった。今日は一日本当にお世話になったが、日本の家庭料理を味わいさらに街中を散策できてとても嬉しかった。

日 付：11月30日（土）【5日目】

大学名：北京語言大学

氏 名：林龍玉

今日はホストファミリーのお子さんが通う学校の創立60周年の記念日とのことで、早くに起きてホストファミリーの迎えを待ち、その後小金井市へ向かった。出発前に笹原さんからは今日のような日は日本人にとって重要な日と伝えられたが、正にその通りであった。その多くが10歳にも満たない子どもだったが出し物はとても素晴らしくレベルが高かった。それらが終わった後やっと澄川さん一家と挨拶を済ませることができた。

昼はお子さん達がリラックスできるようにと彼らが好きなレストランで食事をとった。初対面ではあったが澄川さん一家はとても親切でよそよそしさは全くなかった。お子さん達はいずれもピアノを習っていたため、食後は息子さんをピアノ教室に送り届け、奥さんが付き添い、私と澄川さんそして娘さんは書店で彼らの戻りを待った。日本の本はその多くがコンパクトで持ち運びし易いが、値段は比較的高かった。その後息子さんが戻り、スーパーで夕食の買い出しをした。

スーパーは澄川さん宅から割と近く、歩いていける距離であったが、出かけた時には空は完全に暗くなっていた。そうした中、息子さんが突然お母さんとしりとりゲームを始め、私も自然とそれに加わり5人でゲームをすることになったが、その瞬間、自分がまるで彼ら家族の一員で、澄川さんの娘また兄妹達のお姉さんであるかのように感じられた。

澄川さんは関西人であったため、たこ焼きを手作りしてくれた。それはとても特徴的で、私は初めて「えび焼」（たこをえびに変えたもの）というものを食べたが、とても美味しかった。食後はお子さん達とゲームをするなど皆で楽しい時間を過ごした。

日 付：11月30日（土）【5日目】

大学名：北京語言大学

氏 名：黄德尧

たとえ日本で留学をしている人でも日本の一般家庭での生活を体験できることはほとんどないと思う。この日の朝9時、私たちは家族の迎えを待つ幼稚園児のようにホストファミリーからの迎えを待っていた。

坂井さんの姿を目にするまでは本当に落ち着かず、ホストファミリーの皆さんはどういう人なのか、これから二日間のホームステイでいざこざが起きたりしないか、互いに言葉の問題でうまく交流できないのではないかなど色々な心配があったが、実際に坂井さんと会ってからはそうした心配は無用であったと感じた。坂井さんはとてもフレンドリーながらも礼儀正しく程良い距離感を保ってくれた。とは言え、私は坂井さんとの交流が深まるにつれ、初対面では話しづらいような話題についても自然と話をするようになり、それにより私たちの関係はさらに深まった。

朝は森美術館で東京を一望し、その壮観な景色を堪能し、昼は一蘭で汗だくになりながら5倍の辛さのラーメンを食べそしてビールを飲み、午後の浅草寺では坂井さんから参拝の仕方を教わった。また夜の六義園では楓の景色を觀賞し居酒屋で焼き鳥を食べながらいろいろな話をした。言葉が完全に通じるわけではなかったが、互いの心の交流は何の障害もなく続いた。国には境界があるが、心には境界というものは存在しないのである。

それは正に、私が坂井さんと会った時に述べた「日本語がうまくないので何か失礼な部分があった際はお許ください。」という言葉への、「心を通じ合わせることが交流であり、言葉自体はさほど重要ではない。」という坂井さんの回答と同じものであった。

日 付：11月30日（土）【5日目】

大学名：中国伝媒大学

氏 名：王一夏

キャノンの社員である野津智史さんは、11月10日から私のためにスケジュールやプランを練ってくれていた。二人のお子さんもととても可愛く、私の心は癒された。

川崎市の藤子・F・不二雄ミュージアムは私がずっと行きたいと思っていた場所の一つであった。私は、天真爛漫さはどの年代にも必要不可欠なものだと思っている。私にとってドラえもんは真に力や感動をくれる作品であり、私の心を宿命論という泥沼から救い出し、未来は変えられることを気付かせてくれたのはドラえもんであった。また誠実であることの素晴らしさを教えてくれたのもドラえもんであった。ミュージアム内で私は野津さんとドラえもんの歌を歌ったが、この時私は、優れた文芸作品は両国の人の心をつなぐ大きな力になるということを強く感じた。

海老名市の野津さんの御宅では初めて手巻き寿司を食べ、その美味しさは後でまた食べたいと思うほどであった。

その夜の交流は4時間ほど続き、色々なテーマについて意見交換をしたが、その際野津さんの奥さんからは「よく知っているね」と驚きの声があがっていた。その他内容的に難しいものについては互いに漢字に書いて交流を行い、その量は6ページにも及んだ。いずれにしても漢字文化圏に属する互いの交流はとても楽しいものであった。

日 付：12月1日（日）【6日目】

大学名：北京大学

氏 名：姜姍汝

今日はホームステイの2日目で、初日の活動を経て私たちはより気軽そして自然に交流できるようになっていた。ホストファミリーの御宅は戸田公園近くにあり、ヨット・ボート競技の練習場からも近かった。ホストファミリーからその風景がいいとお薦めされ、午前私たちはその風景を見に向かった。

そこはかつての東京オリンピック時のヨット・ボート競技の会場であった。開けた水域で、一本の堤防で隔てられ、もう一つの川は東京湾に向かって流れていた。また多くの大学がヨット・ボート競技に使用しており、この日の午前はどういくつかの大学が練習をしていた。爽快な青空の下、学生達は一斉に声を出しながら絵画のような風景の中を進んでいた。その時私は寒い北京と寒風の中で凍える人々を思い出し、彼らを羨ましく感じた。

お昼、私は初めて日本の本場のカツ丼を食べたが、カラッと揚げた豚カツに卵と出汁が組み合わさり、一口食べると体と心が幸せに満たされた。

午後、長尾さんと私は東京国立博物館を訪れ、私はここで初めて日本の歴史について系統的に知ることができた。長尾さんからは丁寧な解説を頂き、また館内の展示品も華麗な着物や武士の鎧兜そして書道や絵画作品など様々で、中国文化の日本への影響そして中国文化がどのような継承や発展を通じて特徴的な日本文化を形成していったのかという点について知ることができた。

その日の夜は他の団員達と東京タワーを見学した。きれいな夜景に私たちは衝撃を受け、現代の都市を代表とする人類の文明はこの地球という星における奇跡だと感じた。

日 付：12月1日（日）【6日目】

大学名：北京大学

氏 名：李書承

日曜日、私たち5人は銀座や江戸東京博物館そして皇居を訪れ、美しい景色を堪能すると共に私の観光の目的も達成することができた。ここではホームステイの2日間を通じた体験について述べてみたい。

学校での時間が長かったためか、生活とはどういうものなのか私はすでに忘れていた。だが今回のホームステイを通じて私はそうした長く忘れていたものを目にし、さらに思い出すことができた。ホストマザーはホストファザーと私のためにお酒やおつまみを準備し、子どもたちは粘土遊びをし、また床に寝そべってテレビを見ている。私とホストファザーは社会の現状やライフスタイルについて話をし、ホストマザーは話を聴きながら子どもの歯磨きをする。彼らは私という人間ましてや外国人が一人増えたことを全く意識していないようだった。そうした彼らの自然さに私は衝撃を受け、私はこれまで何を失ってきたのか？私が追い求めるもの、そのすべては何のためなのか？あらゆるものが慌ただしく過ぎていく一方で、静けさの中にも生命が潜んでいることを忘れていたと痛感した。それ以外にも、彼らが互いに支え合い共に歩いていく姿に私はとても感動した。彼らはきっと互いを自分の生命の中で最も大切な存在だと認識しているからこそ相手のために進んで多くの時間や気力を使うのだと思った。

最後に私が彼らにプレゼントを渡す際、このプレゼントは北京大学の図書館に関連したもので、傍の文字は「勝ちたくはないが、それ以上に負けたくない」という意味で、この言葉には人生には様々なスタイルがあり、自分が究極の目標とする状態に必ず到達しなければならないということではなく、他人を害したり自分に対して無責任な選択をした

りしてはならないという意味が込められていると紹介した。だが私は彼らからこうした精神を見た思いがした。彼らには遠大な目標はないかもしれないが、仲睦まじく互いに支え合うことも素晴らしい生活だと思う。

彼らとの2日間で私は慌ただしい中に生命の輝きを目にしたような気がした。そして、それらはより鮮やかに感じられた。

日 付：12月1日（日）【6日目】

大学名：北京語言大学

氏 名：黄鑫

今日はホームステイの2日目、朝起きてホストファミリーと挨拶を交わし朝食を食べた。朝食は海苔とおでんで、ホストファザーからは納豆をすすめられたが、あの味は正直なところ耐えられなかった。

午前中はホストファミリーのお兄さんと秋葉原に向かった。秋葉原はアニメ愛好者が憧れる場所であり、もちろん私も行きたいと思っていたが今回その夢がかなった。その後家電のお店やアニメグッズのお店などをまわったが、ここは夢のような場所だと思った。それから暫くしてお姉さんが合流し私たちはゲームセンターで遊んだ。日本のUFOキャッチャーは中国のものよりも魅力的な商品があったが操作が難しかった。

お昼はラーメンとなり、私は定番の醤油ラーメンを食べた。麺は弾力があり、スープはコクがあったが少ししょっぱく感じた。恐らく日本人はしょっぱいものを好むのだろう。これは北京の食事が油が多いのと同じようなことなのだろうか。

その後に起きた出来事はとても感動的で強く印象に残った。私たちが秋葉原でラーメンを食べていた時、ホストファザーとホストマザーから電話があり、東京湾を周遊するチケットを取ったとのことで私たちはラーメンを食べた後に東京湾に向かった。観光バス内ではガイドからコースの紹介があったが、話すスピードが速すぎて私は全く聞き取ることができなかった。またこの観光バスは船に形を変え海の上を航行することができ、私たちは東京湾を遊覧したが、こうした体験は初めてだった。東京湾からは遠くに東京タワーやスカイツリーなど多くの建築物を目にすることができ、この国の美しさや豊かさに感嘆させられた。そして頭上をカモメが飛んでいく様子に心はとても清々しくなった。

午後にはお別れとなり、ホストファミリーの皆さんはホテルまで私を送ってくれた。お別れの際、ホストマザーから包みの一つを受け取った。中を開けるとそこには一緒に撮った記念写真があり、ホストマザーがわざわざ現像に行き、フォトフレームにそれらの写真を入れてくれていた。こうした思いやりには私はとても感動させられた。次回日本を訪れた際にはまた彼らと出かけたかったと思った。

インスタグラム上にホストファミリーのお兄さんからの投稿があり、自分に弟が一人できたとつぶやいていた。いつかまた彼らに会いたいと思った。最終日の歓送会には私たちを見送りに多くの人が駆け付け、中には子ども連れの人もいた。私たちは歌を歌い食事をし、その後会場を離れようとした時に、団員の一人が誕生日とのことでバースデーケーキが運ばれてきた。皆さんのそうした気配りはとても感動的で涙があふれた。

そして帰国の途に就く際、中島さんは涙し、私も涙した。皆と過ごした日本での8日間の体験、学びそして生活は私の一生の思い出となった。私自身これから両国の友好交流の使者として日中友好事業に自分なりの貢献をしたいと思った。

日 付：12月1日（日）【6日目】

大学名：外交学院

氏 名：姜雅琦

朝起きると、ホストマザーが朝食の準備をしていた。その後食卓には手の込んだ西洋風の食器とともにサラダやサンドウィッチ、ヨーグルト、フルーツ等が並んだ。食事の際は西山さん夫婦と楽しくおしゃべりをした。その後西山さんの娘さんに会った。時間の関係で多くの交流はできなかったが、それでも彼女の優しさやフレンドリーさは感じることで

きた。

朝食の後、西山さんとの「東京探索の旅」が始まった。特筆すべきは、西山さんはわざわざ事前にスイカにチャージをしてくれていたのも移動がとてもスムーズだったことである。西山さんの気配りにとても感謝している。

幸運にもこの時期、江戸東京博物館では浮世絵展覧会を開催していた。私が興味を持っていると知った西山さんは両国にあるこの博物館の見学に連れて行ってくれた。そして私たちは多くの著名な作品を観賞した。私にとって間近での浮世絵鑑賞は初めてであり、多くの収穫が得られた。また展示されていた多くの作品は世界各地の有名な博物館から取り寄せたものでいずれも世界的な名画であり、そうした作品を一度に鑑賞できる機会が得られたことはとても嬉しかった。

昼食に美味しいラーメンを食べた後、私たちは江戸東京博物館の常設展示エリアを見て回った。そこでは江戸時代の様々な建物やライフスタイル等が紹介されていたため、私は江戸時代の歴史や文化について幅広く知ることができ、それを通じてより東京や日本への理解を深めることができた。

観光が終わり西山さんは私をホテルまで送ってくれた。この2日間の西山さん一家のおもてなしにとても感謝している。彼らから受けた御恩や温かさは一生忘れられないものとなった。

日 付：12月2日（月）【7日目】

大学名：北京大学

氏 名：王遠非

今日は最終日の前日である。午前私たちはまず三菱 UFJ 銀行を訪れた。三菱 UFJ 銀行は日本でも最大規模の銀行の一つである。かつてドラマ『半沢直樹』を見たことがあったため、日本の銀行にはとても興味を持っていた。スタッフから三菱 UFJ 銀行の国内外における拠点や組織の現状についての紹介があり、タイ等の国では投資銀行も設置しているとのことであった。その他同銀行は中国とも多くの関係があり、日中国交正常化の前から中国とは通貨に関する合意が交わされていた。しかも、中国での多くの日系銀行における「最初」はいずれも三菱 UFJ 銀行であり、団員達は外貨管理、ブロックチェーン技術そして日本企業での業務や生活等について積極的に質問をし、多くの収穫が得られた。

お昼は日比谷松本楼で食事をとり、そして孫中山、梅屋庄吉両氏の感動的な友情に関する映像を見た。当時孫中山氏は国を守るための革命運動に力を入れており、梅屋庄吉氏は東アジアの国々が西側列強からの抑圧を受ける現状を憂い、中国をそうした状況から脱却させることを決意した。そして梅屋庄吉氏は「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」との言葉とともに孫中山氏の革命事業を支えた。これは実に感動的な革命の友情であり、日中両国においてより多くの人がこうした友好的な考えを持つようになれば、両国関係はきっとより長期的な発展をするだろうと思った。

その後、私たちは暫しの「帰国」をし、中国駐日本国大使館において今回の訪日活動に関する報告及び交流を行った。団員らの話からは、皆が多くの感想を持っていることが感じられた。そして日本の文化や制度等への踏み込んだ理解以外にも、現在の日中両国関係についての意見の発表とともに、メディアの中国に対する実情に合わない報道等の両国の友好を阻害する一部の問題についての指摘もあった。そうした中、参事官は私たちからの質問に率直な回答をされ、私たちは日中関係についてより深い認識を得ることができた。

夜は早稲田大学での交流と懇親会に参加した。全体的に京都大学での活動内容とさほど変わりはなく、日中双方の学生は人生プランや課外活動といったテーマに関して交流を深めた。懇親会では私たちは団歌を披露し、早稲田大学の学生からはお返しとして校歌が披露された。

明日は最終日であり、今回の活動が円満に終了することを願っている。

日 付：12月2日（月）【7日目】

大学名： 北京大学

氏 名： 張一諾

今日最も印象深かった訪問先は松本楼であった。松本楼は梅屋庄吉氏と孫中山氏の革命時期の友好に所縁があり、また歴代の中国国家主席が日本訪問をする際の最初の目的地となっていた。私たちは今回そうした松本楼で食事をするようになった。松本楼に足を踏み入れるとすぐに古いピアノを見かけたが、それは孫中山氏の夫人である宋慶齡女史が日本滞在期間中に弾いていたピアノとのことであった。私たちは二階の宴会ホールで食事をとり、その間、梅屋庄吉氏の曾孫にあたる方からの梅屋庄吉氏と孫中山氏の友情についてのお話を拝聴した。この時私は初めて、当時孫中山氏が辛亥革命を起こした際に梅屋庄吉氏からの多大なサポートを受けていたことを知り、自身の財産を投げうって隣国の問題の解決を支援するという梅屋庄吉氏の行いに、これはどれほどの愛なのかと深く感動した。また梅屋庄吉、孫中山両氏の子孫は現在でも交流があり、共に日中友好に貢献をされている。

夜は早稲田大学での活動で再び日本の学生と交流することができた。この日の交流では人生プランや課外活動等についての討論を行い、日本の学生は私たちと似ている部分が多く、同じような悩み面に直面していることに気が付いた。その時私は自分の学校に戻ったような感覚がした。言葉こそ完全には通じないが、私たちは互いに共通する感情を抱えていた。

日 付： 12月2日（月）【7日目】

大学名： 北京語言大学

氏 名： 牙暢

今日の午前には三菱 UFJ 銀行を訪れた。銀行のスタッフからは同銀行の概要や業務内容そして自身の業務における経験談等の紹介があった。そして、私たちからの様々な質問に対して丁寧な回答を頂いた他、日本での生活や日本語を専攻する学生の将来的な進路等に関するアドバイスも頂いた。それらを通じて私たちは銀行という業界、また三菱 UFJ 銀行について理解を深めることができた。

その後、日比谷松本楼で昼食をとり、さらに孫中山、梅屋庄吉両氏の革命時期の友情についてのお話を拝聴した。梅屋庄吉氏の辛亥革命におけるサポートには敬意を表するとともにとても感動させられた。日中両国の人々はより多くの交流や更なる理解によってより優れた協力関係や友情を構築することが可能であることは事実が証明しており、日本語を学ぶ私たちは、現在両国関係が好転に向かう中で双方の理解を深めるために各自の貢献ができると思っている。

松本楼での活動の後は中国大使館に向かい、暫しの帰国となった。大使館内では皆は家に戻ったかの様に気軽な交流を行い、今回の活動における収穫の紹介や疑問また問題点についての提起があり、参事官から丁寧な回答を頂いた。

早稲田大学での活動は非常に楽しく、皆は大学での日常生活や人生プラン等について交流を図り、楽しくお話できたと同時に両国の大学間の共通点や相違点についてより深く知ることができた。

日 付： 12月3日（火）【8日目】

大学名： 北京師範大学

氏 名： 張琬怡

今日は日本での最終日で、この日記は帰国の機内で書き終えた。

朝はまず私たちが宿泊したホテルニューオータニの見学を行った。日本でもトップクラスの有名ホテルであるホテルニューオータニは環境保護の面でもとても優れていた。生ごみを有機肥料に変える、野菜等の洗浄に使った水を浄化しトイレの洗浄用とする、自家発電により消費電力の一部を賄う、発電の余熱を水の加熱に使用する等の環境にや

さしいエネルギーの再利用からは、日本人の環境意識の高さに驚かされると同時にこれらの試みは私たち中国人が学ぶべきものだと感じた。またホテル内には日本庭園があり、そこではかつて教科書で見た「枯山水」を実際に目にすることができ、個人的にとっても満足できた。

お昼は私たちの歓送会が開かれ、ホストファミリーの皆さんや日中経済協会の役員の方々も出席された。私たちは席上それぞれに今回の活動を通しての感想を述べ、さらに団歌を披露し感謝の気持ちを伝えた。私のホストファミリーが参加できなかったことは残念だったが、彼らへの感謝を伝えるために日本語と中国語の両方を使い手紙を書いた。また席上最も感動したのは、団員の一名がこの日丁度誕生日で、先生方がみんなには内緒でケーキを用意してくれたことであつた。

今回の旅は忘れられないものとなったが、それは多くの知識を得たり見識を広めたりできたからだけではなく、それ以上に多くの心優しい人と知り合うことができたからであり、彼らは私たちの今回の活動のために苦勞を厭わず、順調に進むように手配をしてくれた他、多くの心温まる瞬間を残してくれたのである。

この思い出はずっと大切にしていきたいと思う。

今回の活動に携わったすべての人に感謝すると共に、勇気を出して今回の活動への参加を申し込んだ自分自身にも感謝をしたい。

日 付：12月3日（火）【8日目】

大学名：中国伝媒大学

氏 名：江篠芋

A.Study System of Ecofriendly Hotel

現在、多くの日本企業は持続可能な発展に力を入れ始めているが、ホテルニューオータニは其中でも特に優れた取り組みをしている。私たちは同ホテルにおける生ごみを利用した肥料製造や野菜等の洗浄用水を活用したトイレの洗浄用水への再利用といったプロセス及び自家発電装置を見学し、それらの高効率性に驚かされた。小学生の頃から「水を多目的に使用する」との考えを学んでいるが、ホテルニューオータニはそうした考え方を実際に行動に移しており、私たちは学ぶべきだと思った。

B.Surprise and Impression

今日は私の20歳の誕生日で、また初めて海外で過ごす誕生日となった。有難いことにホテルニューオータニからケーキを頂いた他、皆さんからの祝福を受け、感動のあまり涙が止まらなかった。今日は多くのホストファミリー（一部子ども連れ）が歓送会に出席したが、残念ながら私のホストファミリーの鈴木さんにお会いすることはできなかった（5人のお子さんがいる共稼ぎなので、来られない事情については理解している）。そして最後にバスに乗りホテルを離れる際、ホストファミリーの皆さんが私たちに手を振りお別れをする様を見て、私は再び涙してしまった。私は人と人との真摯で純粋な兄弟の情、そして国籍に関係なく、憎しみや損得がない純朴でまた自発的な共感というものに感動した。また礼儀の国の人々の影響を受け、日本において私はそれまで以上におもてなしの心を持ち、一人ひとりに対して誠実に向き合うようになった。8日間の訪日の旅は一段落し、私は団歌の「いつでも何度でも」を思い出した。私は間もなく大海原の向こうに霞む場所に戻るが、時間がくれた出会いを信じているので、今回の思い出はずっと胸にしまい、日中友好に自分なりの最大限の貢献をするとともに、初心を忘れず「一生懸命」により良い明日に向かい努力していきたい。

日 付：12月3日（火）【8日目】

大学名：外交学院

氏 名：薛欽月

旅の最終日、前日僅か数時間しか寝なかったのにも関わらず、意外なほど寝覚めが良かった。

朝気持ちよくシャワーを浴び朝食を済ませた後、最終日の活動が始まった。最終日は私たちが宿泊したホテルニューオータニの見学と歓送会といった簡単なスケジュールであった。ホテルニューオータニでの数日間の滞在における感想は高級感という言葉に尽きる。だが、3つのレストラン、2つのビルそして多くの商店を抱えるホテルがこれまで環境保護、リサイクル、クリーンな生産に尽力していたのである。環境保護やリサイクルを非常に重視している国である日本はこうした面において大多数の国や地域よりも進んでいるが、ホテルニューオータニはより優れた取り組みをしていた。非常に大規模で大量の浄化处理そしてリサイクルの設備により、ホテルニューオータニは単体のホテルでありながらも「自給自足」を実現していたが、中国企業はこれらを実現できるのだろうかと思った。

最後に歓送会の時を迎えた。「逢うは別れの始め」という道理は分かっていたが、実際にお別れをする時になるとやはり複雑な気持ちになった。歓送会では各学校の代表者からこの8日間の感想についての発表があり、それらを聴きながら、彼らの気持ちに私自身強く共感した。今回知り合った団員と常に一緒に行動して生まれた感情、ホストファミリーとの約2日間での感動等は私が日本を訪れる前には想像すらしていなかったもので、ましてやこの数日間での自分の人生や進路について考えさせられたことは言うまでもない。

「出会いとは時間がくれたものなのであれば、お別れの際も笑顔で思い出を胸にしまふ。命は無限に小さくまた大きくもあり、見つけるため又はお別れのために一生を費やしたとしても、それは他人を十分感動させるものである。」

日 付：12月3日（火）【8日目】

大学名： 外交学院

氏 名： 余嘉誠

時が経つのはとても早いもので、あっという間に今回の日本訪問も終わろうとしている。今日は私たちが3日間宿泊したホテルニューオータニの見学をしたが、このホテルのごみ処理、汚水の循環利用、自家発電そして発電時の熱を利用した水の加熱等には持続可能な発展の理念が込められていた。また同ホテルの日本庭園の美しい環境は私たちの心を癒すものであった。経済が発展する中で、持続可能な発展の理念の根強さこそが生態環境維持におけるベースである。

歓送会ではホストファミリーの皆さんと再会できとても嬉しかった。だが、この再会もこの後のお別れが原因であった。

「親愛なる旅人よ、この旅は短くも長くもあるが、最終的には素晴らしい風景になる」との団歌を歌い終わると、ステージ下の日本の皆さんは涙していた。この涙には名残惜しさや未練といった感情が含まれ、各人にとっての日中友好が凝縮されていると私は感じた。

空港でのお別れの際、中島さんも涙していた。今回の日本訪問の意義に関して私個人としては当初の願いを超えるものであった。私たちは日本企業の文化や精神を学び、日本文化を体験し、紅葉による美景を観賞し、日本を知りそして団員とも親しくなった。今回の8日間の活動はきっと私にとって最も素晴らしい思い出の一つとなるだろう。それに対する私からのお返しは、将来的に日中友好事業に携わるとともに、今回の収穫や感想といったものを身近な人に伝えることである。

最後に、中国日本友好協会、中国日本商会、日中経済協会、中島さんそして私たちの今回の活動に携わったすべての人に改めて感謝を述べるとともに、皆さんとの再会を楽しみにしている。

学生たちの観た日本

大学名： 北京大学

氏 名： 姜姍汝

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

8 日間の交流が終わり、日本人の他人への思いやり、そしてヒューマンケアが印象深かった。

私のホストファミリーである長尾さん夫婦は私を迎えるために沢山の準備をし、私が日本を訪れる前からメールや電話でのやり取りをしていた。長尾さんは家族の紹介をしてくれた他、私のしたい事を尋ね、東京の天気等について知らせてくれるなど、その細やかさは本当の家族に対するもののようであった。そして実際に会った際、長尾さんは今回都内で巡るルート、都内の電車路線図、衛星図、さらには日中の各時代の対照年表等を準備していた。また長尾さんは私が日本の文化について知りたいとのことを把握していたので、神保町の様々な書店そして東京国立博物館に連れて行ってくれた他、さらに道中では詳しい解説までしてくれた。長尾さんのサポートにより私は沢山の収穫を得ることができた。そして夜の長尾さん宅では、奥さんがエアコンやバスタブ等の使い方を丁寧に教えてくれた他、歯ブラシやパジャマなどの必需品を揃えてくれていた。それはまるで実の娘に対するもののようで、私は彼らの思いやりにとっても感動した。

その他、生活のあらゆる面において日本のヒューマンケアが感じられた。ホストファミリー宅の照明のリモコンは暗闇の中では「点灯のボタン」だけが光り、たとえ視力のよくない高齢者でも簡単に使うことができる。さらに浴室内のシャワーヘッドを置く棚は一つ所に固定されてなく、長さの調節ができることで身長の高さを問わず使うことができる。日本のインフラの身体の不自由な人や外国人への配慮の度合については言うまでもなく優れている。少数の人への配慮というものからは最終的に国や社会の先進性を見て取ることができる。

生活において人は様々な困難に向き合うが、日本人のマナーや思いやりそして日本の様々なヒューマンケアに満ちたデザインは、そうした人々に癒しをもたらすものであり、これこそが国や民族の人間味だと思う。

大学名： 北京大学

氏 名： 張力丹

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

「多くの書物を読むよりは多くの地を巡り歩いた方が良い」との中国のことわざにあるように、今回の日本での活動において私たちは様々な土地を巡り多くの収穫を得ることができた。その中でも印象深かったものが二つある。

一つめは日本人の各種製品のデザインにおける「人間本位」の理念である。デザイナーは使用する人のあらゆる需要を踏まえ、人を根幹に据えデザインをしている。例えば、空港で荷物の預け入れをする際に気付いたのだが、中国の空港の搬送用ベルトコンベアとは違い、日本の空港の搬送用ベルトコンベアの高さは地面からより近いと、乗客は重いスーツケースを持ち上げることなく直接ベルトコンベアに乗せることができた。こうしたデザインには高度な技術が必要というわけではないが、確実に乗客の利便性を高めるものであった。中国の多くの企業が技術の先進性や超越を追い求める頃、日本の企業はデザインのプロセスにおける技術と人の相互作用を重視し、技術と人の需要の融合により応用価値を最大限に高めている。この点については、中国はまだ多くを日本から学ぶ必要がある。

二つめは、製品のデザインにストーリー性があり、自国の文化をPRしている点である。ニューメディアや各 SNS サイト以外に、製品のデザインもまたストーリーを伝える一つの方法であり、日本の企業はこの点において非常に優れていた。パナソニックの電気製品を例にすると、同社はスピーカーを茶筒と融合させ、茶葉を入れることができるスピーカーを生み出していた。また両手で水平に持った時にだけ点灯するランプというものもあった。これらはそれぞれ日本の茶文化や心の平穏を求める禅文化を体現しており、巧みなデザインにより日本文化の特徴をPRしていた。中国は同様に長い歴史と豊富な伝統文化を持っているが、日本企業のように自らPRをするというような製品デザインについては持ち合わせていない。現在中国は製造業における構造転換と高度化の途中にあり、製品に文化的要素を含め国家ブランドを構築するというのは実現可能な一つの方向性だと思う。

今回の交流活動において私は日本が世界をリードするデザイン理念を目にすることができたが、これらを学び手本とすることは、中国の製品のさらなる発展に役立つと思う。

大学名： 北京大学

氏 名： 李書承

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

1. 日本人は非常にマナーを重んじており、他人に対して常に礼儀正しくまたルールをしっかり守っている。

①サービス業に従事するスタッフは対応している目の前の客以外にも丁寧にあいさつをする。この点はコンビニやホテル、レストランを問わず共通しており、非常に礼儀正しい。②一般の旅客は自発的に列に並び、エレベーターに乗り込む際は「すみません」と声掛けをする。③お別れの際は相手の姿が見えなくなるまで手を振り、なるべく遠くまで見送ろうとする。④しきたりを重視し受け継いでいる。思いやりの点については、日本人は進んで他人の手助けをし、また不必要な面倒事を回避している。それと同時に過度な親切により相手を困らせることはなく、塩梅を心得ている。

2. ユーザー体験と品質管理。

日本では製造業や設計業において製品とユーザーとの関係を非常に重視しており、様々な些細な部分に工夫を凝らし、ユーザーの製品への満足度を極限まで高めていると同時に品質管理が徹底されているなど、日本人のモノづくり精神が非常によく示されている。

持続可能な発展の理念：今後の環境問題は現在よりもさらに厳しいものとなり、大国である中国もまた自身の責務を全うする必要がある。

汚染の減少、廃品のリサイクル利用等に関する高度な技術は今後中国における需要がますます高まると考えられる。こうした方面において日本のホテルや一般家庭では素晴らしい取り組みがされている。

インタラクション設計：日本の製品や生活施設はいずれも人との相互作用を重視しており、VR や AR といったインタラクション技術により自らが紹介する事物を人々により良く体験させている。

大学名： 北京大学

氏 名： 王遠非

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の日本訪問において最も印象深かったのは美しい嵐山や賑やかな新宿といった場所ではなく、日本人の「他人に迷惑をかけない」という国民性であった。日本は資源が不足した人口密度が高いため、日本人は自分個人の利益のために全体の利益に影響を与えることがないように配慮しなければならない。よって電車の乗り降りの際は列を作り、エスカレーターでは左側に立ち、右側を急ぐ人用に空ける。また日本の狭い路地では数人が横並びになると道路を塞いでしまうため、自発的に二人一列になる。こうしたことから、ルーズな中国人は日本という土地においては比較的目立ってしまう。その他、日本のサービス業は心が温まるような対応をしていた。店員は常に笑顔で出迎え、様々な施設はいずれもヒューマンケアに満ちていた。浴室の鏡は顔の部分が曇らないように処理されていて、空港のカウンターのベルトコンベアは荷物が載せやすいように低く設計されていた。日本人のこうした自制、他人への思いやりといった国民性については、主に自然資源面の制約から来ている、それにより彼らは外部への探求ではなく内部での自省をより重視するようになったのだと私は思う。

その他、日中交流の問題についても述べてみたい。データによると、中国人の日本人への印象は日本人の中国人への印象よりはるかに良い。その理由は二つある。一つめは海外メディアの中国に対する正確ではない報道により日本人が中国についての正確な状況を知ることができないという点、二つめは日本人の中国への興味が不足している一方、中国人は日本にとっても興味を持っているため、中国人は進んで日本を知ろうとし、自然とより好感を持つようになる。そのため、今後において日中交流を進めるためには、この二つの点から着手する必要がある。

最後に日本の技術について述べてみたい。私が思うに、日本のマイクロエレクトロニクス、自動車、新幹線等の科学技術は現在ではかつてほどの優位性を持っていない。また中国は現在の成長ペースから見て日本の科学技術を将来的な目標とする必要はない。反対に日本のデザインが中国には欠けていて、将来的に中国において大きな需要が生まれると私は見ている。ソニーの技術はファーウェイよりも優れているとは限らないが、人々はソニーの独特なデザインに魅了される。また日本の博物館での展示内容は中国よりも優れているとは限らないが、日本の展示方法がよりデザイン性に富んでいるため、魅力的になる。そのため、将来的に中国はこうした面で大きな需要や発展の余地があると思う。

大学名： 北京大学

氏 名： 張一諾

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

5.アニメなどのソフトパワー

日本経済の発展度合や日本の発達度合に関しては多くの人がきっと一定の理解をしていると思う。そのため私は日本のソフトパワーについて述べてみたい。日本のソフトパワーについて私は以下二つの総括を行いたいと思う。

一つめは、日本国民は概ね素養が高く、彼らは「他人に迷惑をかけない」との原則に基づき良好な公共秩序を守っている。路地では右側を歩き、エレベーター内では騒がず、電車を待つ際はきれいに列を作る、日本人のこうした強いマナー意識が日頃の素養の高さにつながっている。これは日本の教育レベルの高さを示している。

二つめは、日本は優秀な文化の吸収や継承に長けている。日本は中国との交流が盛んで、唐や宋の時代からすでに漢字、茶道、禅道等の中国の優れた多くの文化が日本に伝えられていた。これらの文化は中国から日本に伝わったものではあるが、現在では日本において大きく発展している。日本はこうした外来の優れた文化を取り入れ、その精髓を吸収し、それらを守り数百年後の今日まで継承しており、この点が日本のソフトパワーの強さの要因の一つだと思う。これに対して私たちは、時に外来の文化をあまりにもたやすく受け入れ、それらを選別することなく、さらに自身の文化の継承や保護を疎かにしがちである。

今回の日本訪問では多くの収穫が得られ、日本についてより全体的で新たな認識を持つことができた。そして日本は単に経済大国であるだけでなく、そのソフトパワーの発展ぶりについては私たちが学ぶべきだと思った。そして私は近い将来、中国と日本がより多くの面で協力を深め、互いの交流が増し、共に学び進歩していくと信じている。

大学名： 北京師範大学

氏 名： 肖瑾

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

日本人の集団帰属意識に関して、日本語を学ぶ私はかつて先生から、日本文化においては「他人」と「自分」を明確に区別していると聞いたことがある。これは自分と他人及び自分が所属する側と他人が所属する側を明確にするものであり、この点からは日本人の個人的意識はとても強いがそれと同時に自分の所属する集団全体も重視していると言える。そしてこうした矛盾性は日本文化の中に示されており、今回の日本訪問においては私自身も感じる事ができた。

まず京都大学において、教師からの紹介であれ学生との交流であれ、彼らは皆「愛国主義」に対する反対姿勢を示していた。この話題については踏み込んだ交流はしなかったものの、全体的に言って彼らは国家的な視点で考えるよりも、個人的視点から個人の権利や利益を守り、個人として独立した思考をすることをより重視していた。この点については、京都大学自身が研究者の集まる場所であり、国よりも自身の研究を重視するために個人の自由を追い求めるのも不思議ではないと感じた。

この他、ソニーの見学では製品の展示であれ企業文化の展示であれ、いずれも「私たち」との強い概念を打ち出していた。『「私たち」は世界に楽しさを届ける』、『「私たち」は科学技術とイノベーションで生活をより豊かにする』、これらは企業を一つの集団にまとめると共に非常に強い帰属意識を生み出すものであり、こうした企業文化は京都大学が示していた個人性とは逆の強い集団性の意識である。

ではなぜこうした違いが生まれるのか？私はその答えを考えたが見つけられなかった。そのため個人の違いと集団の性質の違いに原因を求めざるを得なかった。学術研究の面においては往々にして個人の独立した思考が強調され、企業の運営においてはチームワークが求められる。またこうした違いは日本民族が人の効率を最大限発揮させる上での一つの現象でしかなく、最終的には日本民族が労働力や人材が如何にして役割を最大限発揮できるかを突き詰めた結果だと思われる。

大学名： 北京師範大学

氏 名： 郭蓓蓓

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

マナーや思いやりは私が日本を訪れた瞬間から常に感じられたものであった。日本人は幼い頃から「他人に迷惑をかけない」という教育を受けていることはかねてより耳にしていたが、今回の日本訪問ではその点を目にすることができ、日本人のマナーは過度に親切にすることなくまた冷たい態度をとるわけでもないといった他人との適切な距離を保つという部分に示されていた。私は日本での生活においては他者と衝突することは極めて稀だと思う。なぜなら一人ひとりが他者の利便性を考えて生活しているからで、それは双方が互いに自分の快適な空間を侵さないというウインウインの状態をもたらすからである。

こうした認識は、街中での実体験の他、ホストファミリーとの生活を通じて得られたものである。私のホストファミリーには9歳の女の子がいたが、一般的にこの年頃の子どもは最もやんちゃで、ひいては「嫌われる」場合もあるが、彼女は常に私という「ゲスト」のために自分の欲求を抑えていた。彼女のその利口さに私は自分が恥ずかしくなった。家の中では、この9歳の女の子であれ2歳の男の子であれ、両親のサポートを受けた後は必ず感謝の言葉を口にしていった（逆の場合も同様であった）。他者の邪魔をした場合は謝り、サポートを求める際は必ず敬語を使う等、心からのマナーとは何なのか私は今回本当の意味で知ることができた。

日中間の交流は大きな課題であり、今回の日本訪問で感じられた部分のみについて述べると、日本の大学生やホストファミリーとの交流の際、互いが相手について多くの誤解をしていて、理解が不十分だと感じられた。小さなものでは「中国人は皆卓球が得意だと日本人は思っている」というものから、大きなものでは政治・外交問題など、多かれ少なかれそうした誤解が存在している。しかし中国大使館において「こうした問題の解決または部分的印象の変化については一朝一夕にできることではなく、ましてや一時の言葉で解決できるものでもなく、行動により証明そして変えていくものである」との聶参事官の発言にあった通り、今回の日本訪問は日中交流を前進させるその第一歩だと私は思った。

大学名： 北京師範大学

氏 名： 張琬怡

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

ホストファミリーと過ごした二日間は日本人のマナーの良さや思いやりを最も直接的に感じる事ができた期間であった。

まずは食事に関して、初日の夕食ではホストマザーは豪勢な和式の食事を準備してくれて、私の目の前には大小10個近いお碗が置かれ、さらには食後のデザートまでであった。そして翌日の朝食は洋式で、とても大きなフルーツの盛り合わせもあり、フルーツの値段が高いと知っていた私はとても驚かされた。こうした点からはすでに私というゲストへのもてなしの心が感じられた。そして食事の際のお茶に関して、彼らは毎回日本茶にするか中国茶にするかを尋ねてくれた。たとえ私が「どちらでもいい」と言った後でも、「日本茶は口に合うか」、「中国の紅茶でもいいか」とさらに尋ねるなど、彼らの私への思いやりが感じられた。

次に日常生活に関して、彼らは私が聞き取りやすいように喋るスピードを抑えて、多少難しい内容については可能な限り中国語の単語に置き換えるなどしてくれたので、私たちは英語を使わなくてよい程スムーズな交流ができた。また彼らの家のスペースの問題から、彼らは今回私のために部屋を借りてくれていたが、給湯器の使い方が分からずお風呂に入られなかったと知った彼らはずっとその事を申し訳なく感じ、お姉さんもまた自分の責任だと何度も口にしていった。そしてホームステイが終わる時になっても、そのことでしっかりと私をもてなすことができなかったと謝っていた。彼らのこうした態度から、私は彼らに申し訳なく感じさせるくらいなら最初から黙っておけばよかったと後悔してしまった。

いずれにしても、日本人の他者への思いやりや尊重というものは目に見えるものである。食事や言葉それらすべてから彼らの周到な礼儀作法が示され、彼らの思いやりは様々な部分に浸透していて、時に彼らは自分自身よりも他者を大切にしていると感じる程である。だが、こうした思いやりは魅力を秘めていて、他者からのサポートを受ける際に自然と相手側の気持ちを考えるようになる。この点は日本人の性格においてとても素晴らしい部分で、私たちが学ぶべきものだと感じた。

大学名： 北京師範大学

氏 名： 張競文

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本人のマナーの良さや思いやりといった点については、日本に到着した直後から日本を離れる時まで常に驚かされるものであった。

まず日本人のマナーへの重視は生活のあらゆる面に示されていた。その中でも最も印象深かったのは、毎回大学や企業への訪問を終える際、彼らは外まで私たちを見送り、寒い風が吹く中で私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれたことである。最終日のお別れの際、ホストファミリーの皆さんは駐車場を離れ高い場所に立ってまでお別れをしてくれた。その他、エレベーター内に人がいる場合、日本人はエレベーターに乗る際に一言「すみません」と声掛けをしていた。

次に思いやりについて。これまで私は「他人に迷惑をかけない」という理念について耳にしたことはあったが、今回の日本訪問を終え、私は「思いやり」とは迷惑をかけないという点だけではなく、些細な行為又は設計により他者の生活を快適にまた便利にするという点も含まれていることが分かった。日本人は時間に正確だが、それは遅刻であれ早すぎる到着であれ、そのいずれもが他者に不便をもたらすため、取り決めの時間の2分前をベストとしている。そして遅れる場合は事前に連絡をし、早く到着した場合は外で待たなければならない。今回各企業や学校への訪問においては詳細なスケジュールが組まれ、予定の時間になった場合は解説や見学が終わっていてもすぐにそれらを終えることで活動全体のスムーズな進行を保証していた。日本社会の秩序の良さについては様々な点で感じる事ができた。

以下にいくつか例を挙げる。ビュッフェの際、皆は自発的に一つの方向に並んで食事をとっていたが、中国の学生は方向がばらばらで自分が食べたいものがある場所に直接向かうため列が乱れていた。また日本の路地は狭いため中島さんから二人一列で歩き道を塞がないようにとの指示があった。エスカレーターでは左側に立ち、右側を急ぐ人用に空けることで人の流れが止まることがなかった。商店のレジには「入口」、「出口」があり、入口の外で並び、前の客が離れた後にレジの担当者が次の客を呼び込んでいた。公共スペース又は公共交通機関に乗る際、皆は大声で話をすることはなかった。対して北京に戻る機内では、複数の中国人が勝手に歩き回り、靴を履いたまま横向きに寝たり、イヤホンをつけずに動画を見たりする光景を目にし、あまりの違いに私は大きな衝撃を受けた。

この他、日本では人にやさしい設計を沢山目にした。身体の不自由な人への思いやりは行き届いていて、横断歩道にすらも点字ブロックが設置されていた。地下鉄車両内にも荷物棚があり、旅行客が荷物を置けるようになっていた。お手洗いはとても清潔で、トイレは定温になっていて、さらには他人に聞かれたくない音をかき消すための機能まで付いていた。

異文化間の交流は私たちに自分たちの文化を再認識させるものである。今回の日本訪問において私は日本文化について直接的な体験と理解を得ることができた。日本人は思いやりといった面について進んだ理念や実践の成果を持っていて、私たちも学ぶべきだと思った。

大学名： 北京師範大学

氏 名： 桂嘉雨

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回の日本訪問で最も印象深かったのは日本人のマナーや思いやりといった点であった。この点については、エスカレーターでは左側に立つ、電車やエレベーター内では小声で話をする、公衆トイレには常に予備用のトイレットペーパーがいくつか置かれている等日本人の生活のあらゆる面に示されていた。国民の他者への思いやりの度合いというのは総合的な国力を反映する重要な指標だと私は常々思っている。なぜなら、それは短時間で完成する量的なものではな

く、長い年月をかけて積み上げられたヒューマンケアと民族的特徴だからである。かつて英国紳士が「成金」式のアメリカ人を見下していたように、現在では一部の国民の言行により、多くの先進国もまた中国の国民を「成金」式の中国人と見なしている。言い換えると、我が国は近年経済的には大きく発展したが、もし私たちが国民の素養の向上そして国際的イメージの構築や維持を疎かにすれば、私たちの経済的な発展は或いは国のイメージの構築にとってマイナスの影響をもたらすことになるかもしれない。

それと同時に、京都大学、早稲田大学そして三菱商事のスタッフやホストファミリーとの踏み込んだ交流を通じ、私は現在の中国人の日本社会への認識は前向きになっているが、その反面日本人の中国への認識は浅くまた偏ったものに止まっているとの印象が強まった。交流の後、多くの日本の方々から中国への印象が変わったとの言葉をもらったが、私が気掛かりなのは、大多数の人はこうした直接的な交流の機会を持つことがないため、長期的な誤解や凝り固まった印象により、日中両国間の目に見えない壁もまた根本的に打ち破ることができないのではないかという点である。

しかし今回の活動を通じて私は日中間の交流の先行きに自信を持てるようになった。なぜなら、民間交流がもつ活力は政治的な交流よりはるかに大きいものだからで、私たちの活力により本当の日本についてPRし、私たちを通じて本当の中国を知った日本人もまた同様にPRを行えば、日中交流ひいては日中関係の先行きはきっと明るいものになると確信している。

大学名： 北京語言大学

氏 名： 税金妹

テーマ： 1.国民性についての理解

日本という国そして日本人については、中国の近代史を多少知っている人であれば皆特殊な感情を持っていると思う。そうした感情は時代の変化と共に変わっていくかもしれないが、日本と中国は永遠に切れない関係にある。

日本語を専攻してからは意識的に日本に注目し、日本に関する書籍やニュース等を見るようになった。かつて読んだ『菊と刀』では日本人の性格について次のように記されていた：「日本人は生まれつき争いを好むが又穏やかで、好戦的だが又耽美的で、不遜でプライドが高いが又礼儀正しい。頑固だが又柔軟性に富み、従順だが他人の言いなりになることは好まない、忠節を貫くが又裏切りやすい、勇敢だが又臆病でもある。保守的だが又新たなものを好んで受け入れる。」だが、今回日本を訪れて日本社会について実際に体感した後、そうした本に記されていた内容は現代の日本人の心理とはかけ離れていると感じた。

座談会において、ある団員から自身の日本人や日本社会に対する印象についての紹介があり、彼はそれらを「静か」と「活発」という二つの言葉でまとめていたが、私もその二つの言葉がより適切だと感じた。今回の日本訪問では、日本人の様々なルールへの順守や公共スペースでの自制、他人に迷惑をかけない、また自分の愛する事業を数十年間黙々と続ける姿勢といったものを感じることができたが、「静か」な日本人は決して杓子定規ではなかった。日本の企業であれ大学であれ、いずれも自由そして開放的であり、様々な意見の存在が認められまた歓迎され、時代の流れに沿ってイノベーションを行っていた。日本人もまたとても親切で、異国文化を知ることへの期待や異国文化への包容力そして情熱が感じられた。

大学名： 北京語言大学

氏 名： 林龍玉

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

日本人のマナーはあらゆる面に示されていた。頻繁に使う「ありがとう」や「すみません」といった言葉のみならず、それ以上に行為自体から非常に高い素養が感じられた。至る所で整然と列を作っていただけでなく、買い物の際に私自身とても心地良さを感じた。店に入ると挨拶を受け、何も買わずに店を離れても感謝の言葉をかけられた。「SHIRO」で買い物をした後、店員は私が買った商品を踏まえ私が好きな香りを確認した後、香水を手提げ袋に噴きつけお辞儀をして私を見送ってくれた。こうした至れり尽くせりの接客には衝撃を受けた。

ホストファザーは中国への留学経験があり、当時ハルビンへ旅行に行った際現地はとても寒かったにもかかわらず、彼は薄いシャツ一枚であったため、目的地に近づいた頃、親切な中国人がそのままだと凍え死んでしまうと彼に伝え、綿入りの服を買ってあげたばかりか家にも泊めてくれたとのことで、ホストファザーはその時から将来的に機会があれば中国人のサポートをすると心に決めていて、私は彼が受け入れた8人目の中国人学生とのことであった。日中交流は一見大きな命題であるが、実際にはこうした些細なことから生まれるものであり、どちら側の人間であれ実際に相手の国を訪れてこそ真の理解が得られると思う。

近頃の大きなニュースである「高以翔の突然死事件」に関して、一部のメディアは速やかにAEDを使用せず、救助のタイミングを逸したことを原因に挙げている。そして私は今回日本を訪れて、日本においては大きな場所では各駅、小さな場所では企業内までいずれもAEDを配備していることを知った。これは医療従事者も使用する医療機器であるが、中国では配備数が少ないのと、それ以上に使用できる人も少ない現状である。日本の総務省消防庁の2018年の統計データによると、AEDの使用により患者の救命率が53.5%にまで上昇し、単に救急車を呼ぶ場合の救命率よりも6倍の高さとなっている。

大学名： 北京語言大学

氏 名： 牙暢

テーマ： 2.集団帰属意識の強さ

5.アニメなどのソフトパワー

今回の訪日活動で私は初めて日本を訪れたが、初の訪日でこれほど充実した活動に参加でき、日本について幅広い理解が得られたことをとても嬉しく思っている。旅行や留学では行く機会のない場所を沢山訪れ、また様々な日本の人々と交流を深めることができた。ここでは個人的に感じた部分について述べていく。

一つめは、日本人は非常に自身の伝統文化を尊重していると同時にそれら伝統文化を常に発展させているという点である。この点については日本のソフトパワーの強さの理由の一つだと思っていて、特にPanasonic Design Kyotoを訪れた際に強く感じる事ができた。私たちが目にしたのはそのほとんどが生活用品であったが、呼吸や心理状態と連動するランプ、加熱保温技術を用いた茶道具など、同社は技術により製品の機能や使用時の快適性を高めていただけでなく、そうした設計により日本の伝統文化をPRしていた。それらは一目見ただけで日本の美学を示していると分かる。パナソニックは製品の設計により、日本の伝統文化や美学の現代社会における融合と発展を促進していた。

二つめは、日本人の集団帰属意識がとても強いという点である。各企業や学校からはいずれも彼らが自分の企業や学校を心から愛していることが感じられた。企業のスタッフは自分の会社の理念を深く理解しており、自分の仕事に熱中し、自分の価値を信じ、また私たちが彼らの企業に就職するよう勧めていた。

大学名： 北京語言大学

氏 名： 黄鑫

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

今回の訪日活動を通じて最も感動したのは日本人のフレンドリーさとやさしさであった。

私たちの乗る飛行機が出発する際、地上のスタッフはまるで友人の旅立ちを見送るかのように手を振ってお別れをしてくれた。また乗務員は乗客一人ひとりにあいさつをし、サポートを求めた際はやさしさに溢れた笑顔で最高のサービスを提供してくれた。企業訪問ではスタッフから案内や質問への回答など丁寧な対応を受けた。また私たちが見学を終えその場を離れる際は、各企業共にスタッフがゲートまで出てきて私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。はっきり覚えているのは、三菱 UFJ 銀行への訪問の際、雨が降り出したため、銀行側は皆にタオルを準備していた。初め私たちはそのタオルを何に使うのか分からずにいたが、私たちが外に出て雨に濡れた時によくこのタオルは私たちが雨に濡れないようにと準備してくれたのだと分かった。こうした行為はもし私が接待担当者であれば思いもつかない事だったので、本当に配慮が行き届いていると思った。

その他、自由行動の際に気付いたのだが、日本人と同じエレベーターに乗る又は同じ位置に座る際、彼らは皆腰を曲げ意思表示をしていた。この点に関して私は、こうした行為は或いは日本人の信仰が基になっているのかもしれないと思った。日本人は万物には縁があると考えていて、同じエレベーターに乗ったり同じ椅子に座ったりするのも縁であり、彼らはそうした縁を大切にしているため、出会う一人ひとりに対して親切な対応をするのではないだろうか。私が買い物の際に銀座で道に迷い、その後目的地にたどり着いたがすでに店が閉まっていたため、道行く人に尋ねたところ、その人はとても丁寧にお薦めの店を教えてくれたばかりかその店まで私を案内してくれた。ホームステイの最後にホストファミリーとお別れをする際、ホストマザーは皆で撮った集合写真をフォトフレームに入れてプレゼントしてくれた。これにはとても感動して涙がこぼれそうになった。わずか1泊2日の付き合いだったが、彼らは私のために沢山の配慮をしてくれた。私は彼らのこうした「和やかさ」が素晴らしいと思うしまたとても好きである。

日本人の心には「他人に迷惑をかけない」というモットーがある。今回日本を訪れ私はこの点についてはっきりと感ずることができた。電車内では席を争う人はなく、皆が譲り合い、慌てて席を取りに行くことはなかった。この点について私は心地良さを感じた。日本人との交流ではまた、トイレなどのために途中で席を外す際、彼らは「ごゆっくり」と声掛けをする。これもまた他人に迷惑をかけない点の表れで、他人を急かしたり、困らせたりせずに相手の立場で考える。こうした点は日本人の最大の特徴であり、また最大の長所だと思う。

こうした様々な点から私は、日本人の素養はとても高く、礼儀やマナーが行き届いていると同時にこれは文化的な影響の結果だと感じた。日本語には大量の謙譲語や敬語が存在し、日常会話においても敬語やくだけた表現を使い分けられているが、この点が、日本人が謙虚さを常に持つ理由の一つだと思う。その他、茶道や座禅ではいずれも心の落ち着きが求められ、心の落ち着きは冷静さをもたらし、冷静さは物事への対処に非常に重要である。日本人の茶道や座禅への尊重は彼らの穏やかさや冷静さにつながっているのではないだろうか。こうした点は他者との交流において彼らが人を惹きつけるポイントであり、彼らの他者に対する穏やかで優しい姿勢は私たちが学ぶべきものだと思う。

大学名： 北京語言大学

氏 名： 黄德尧

テーマ： 4.日中間の交流

5.アニメなどのソフトパワー

国家間の交流は外交だけに限らず、民間交流もまた極めて重要で必要不可欠なものである。今回の日本訪問において一つとても気になったことは、日本の人々は、中国人が日本について知っている程中国について知ってはならず、彼らの中国への認識は浅くまた過去のものに止まっているという点であった。今回交流をもった日本の一流企業や学校ですらそうなのだから、一般の人々については尚のことであった。

こうした状況の大部分の原因は両国の民間交流の不足にあると考えられる。日本人は常にファイアウォールを持つ中国は外部との往来がないと考えている。確かにファイアウォールの存在はかつて私たちの交流を阻害していた部分もあるが、その他のルートは阻止されてはいない。学生である私たちはより積極的に日本の人々と交流し、ネット上や日常生活において彼らの観念を正し、その後本当の中国というものについて周囲の人へ伝えてもらうことでこそ日中両国の民間交流は継続的に発展していくと思う。

文化の発信の面で日本は常に中国の先を行っており、アニメ文化は世界中の人々から好かれている。対して中国はソフトパワーの向上や発信に力を入れているが、孔子学院といったものについてはうまく大衆に広まらず、良い効果が得られていない。将来的に中国文化の活力を刺激し、中華の文化における悠久の歴史をベースに現代的な手段で中国の物語を発信し、ひいては「マーベル・シネマティック・ユニバース」に対抗する「封神宇宙」を生み出すといったことは、日中間の交流を深めると共に中国と世界の文化的つながりを強めることにもなると思う。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 任光建

テーマ： 1.国民性についての理解

私の日本への印象を単語で表すとすれば、「静か」と「活発」という一見矛盾した単語を選ぶだろう。日本人はこの意味的に矛盾した単語について程良いバランスをとっていて、それは日本の国民性における大きな特徴となっている。

ここで言う「静か」は主に心の落ち着きを指している。誠実にコツコツと努力を続けないと、遠くにある目的に到達することはできないとの言葉の通り、正にこうした心の落ち着きにより日本民族は常に世界の先頭にいる。こうした落ち着きは生活に厳かさをもたらす茶道文化になり、落ち着きの中で生活を営むと共にまた敬虔な座禅文化になり、集中する中で生活における知恵を悟る。また心の落ち着きは学者の研究事業へのひたむきさや集中力になり、企業の品質やディテールへのこだわりになっている。

「活発」は主に思想の活発さを指し、世界にユニークさと創意を提供している。ソニーの言葉を借りると、日本は創意の力で世界に感動を届けている。様々なアニメ、面白さや美学的価値に富んだ製品など、日本は思考や頭脳の活発さで自分たちの総合力を常に高めている。

動かない時は未婚の女性のように静かだが、ひとたび動くと逃げる兎のように俊敏である。日本民族の動と静はまた日本という国の発展にも示されていて、聶佳参事官がおっしゃったように、日本は静かな湖面の下で常に動いており、バランスをとりながら一步一步着実に発展してきた。こうした発展は急激な変化というものではなく、量的変化の積み重ねで、静けさの中で質的变化を実現したのである。

日本訪問を終え、私は自分に「心が穏やかで且つ思考が活発な夢追い人となり、誠実にコツコツと努力を続け、遠くにある目的に到達する」とのモットーを定めた。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 王一夏

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

マナーの良さは間違いなく日本人の大きな特徴であり、思いやりの度合は私の想像を超えていた。そのため日本に到着した当初の数時間の間私は不自由さを感じていた。

多くの人が日本のマナーを基準に中国を見て、中国が到達していない部分については素養が低いと判断しているが、それは正しくない見方である。両国の社会や民族性には大きな違いが存在している。日本のマナーの多くは確かに素晴らしいが、中国の環境には適さないもので、両国の交流のプロセスにおいては傲慢にも卑屈にもならず自分というものをしっかり持った上で対等な交流をすべきである。

それと同時にマナーは一国の国民の素養を測る上での重要な基準であることは否定できず、中国では文明都市の構築において依然としてイヤホンを付けず大音量で動画を見たり、道を塞いだりといった他者をイライラさせる現象が起きている。対して日本の地下鉄は整然とし、また多くの改札機が開いたままでも不正通過する人はみかけられず、道路では皆左側を通行する。それらの背後にあるものについては実際には容易に想像できる。それはつまり自分たちがマナーを守り、部分的な自由を犠牲にすることで公共スペースでの利便性を獲得し、それが最終的に社会全体の効率を高めることにつながっているのである。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 鄭博航

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の日本訪問で印象深かったのは、彼らの生活におけるスマート技術とヒューマンケアであった。日本のすべてのトイレは洋式で、しかも「音姫」の機能そして温水洗浄機能が備わっていて、さらにスイッチには点字が付けられていた。私は中国そして日本でも目の不自由な人を見かけたことはないが、日本では信号灯や点字ブロックを設置した道路といった施設そして普段使う電気機器にもヒューマンケアが示されていた。トイレの機能などは高度な技術というわけではないが最も身近なものである。

その他、ホストファミリーの御宅で体験した音響設備やユニットバスといったスマート家電も印象深かった。それらは一見単純そうに見えるがそうではなく、人々の生活の質を確実に高めるもので、且つ耐久性に優れていた。中国にも似たような音響設備があるが、さほど普及しておらず、使用する割合も高くない。中国にはそうした技術はあるが、生活の質に対する私たち自身の意識が不足しているため、私たちは日常生活をより大切に、ソニーのように生活に楽しさを加え、生活の質を高めていく意識を持つ必要があると思う。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 袁嘉憶

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

日本に到着して間もない頃、体験して最初に驚かされた技術は日本のトイレであった。中国ではトイレの自動化がある程度進んでいるが、日本の全自動化レベルと比べればまだ差があった。トイレの個室に入ると便座の蓋が自動的に開き、使用を終えると自動的に洗浄と消臭を行う。また水に溶けないごみなどはセンサーで開くごみ箱に捨てることができる。手洗いの際の蛇口やハンドソープもまたセンサー式で、トイレの使用のプロセスにおいて手を使うのはドアの開け閉めと手を拭く時だけであった。日本の発達した自動化システムには驚かされると同時にとても羨ましく感じた。当時中国のおばさん達がなぜこぞって日本にウォシュレットを買いに行ったのか分かった気がした。こうした自動的で人にやさしい

設計は中国の人々もまた求めているもので、「トイレ革命」は今まさに中国で展開されている。近い将来、中国のトイレが日本人も驚くほど発達することを願っている。

もう一つ驚かされたのは、日本のホテルにおけるごみの分類と廃水のリサイクル技術であった。ホテルニューオータニではすべての生ごみが分類回収され、いくつかの工程によりそれらのごみは自然界の養分に生まれ変わっていた。また大量の廃水は沸騰、攪拌、沈殿といった工程を経て、飲用水としてホテルに供給されている。こうしたリサイクル技術は一つのホテルを永続的な利用が可能な環境に優しい「永久機関」とするものであり、ごみを出さず、廃水を飲用水に変える、これこそが実際に役立ちさらに人々の生活と密接に関わる持続可能な発展である。中国のホテルもこうした技術を身に付け、根本から食料や水資源の浪費の問題を解決できることを願っている。

かつて日本は中国を師と仰ぎ漢文化を学んだことで茶道や禅の文化が生まれたが、現在中国は日本を師と仰ぎ環境技術を学び優れた点を吸収し、より進んだ普及可能な技術を生み出すことで、科学技術のヒューマニゼーションと環境に配慮した社会またそれらの持続的な発展を実現すべきだと思う。

大学名： 中国伝媒大学

氏 名： 江篠芋

テーマ： 4.日中間の交流

少子高齢化に向けた女性従業員に対する制度及び出産育児福利に関する交流

2019年6月24日、私は自分の微信公式アカウントにおいて『日中両国の恋愛・結婚観と少子化に関する分析』との文章を掲載し、日本の「大志なき時代」における少子高齢化、女性の恋愛や結婚また出産や育児に関する意識の現状について述べた。そして今回日本の各大企業や大学を訪れ交流を行った後、私はこのテーマについて新たな認識を得ることができた。（以下に3つのコメントを載せる）

・京都大学の慶太さんそして野村暁里さんは、「日本において専業主婦の割合は未だに多い」とコメント。

・三菱商事では2014年から「女性活躍」制度を実施し、女性の出産・育児及び就業を奨励するために一連の制度を設けている。その中で金属資源本部の福田圭馬氏はこうした制度は少子高齢化の解決につながる素晴らしい取り組みであるとうした制度への支持を表明し、同制度の実施を担当する人事部の中西佐和子氏からは、女性、育児基金と「ダイバーシティ室」の取り組みはかつて多くの男性社員から理解が得られなかったが、近年では幅広く実施されさらにプロセスもより簡略化された。またここ5年間では三菱商事として同制度に24億円が投入されたとお話があった。

・鈴木友絵氏（ホストファミリー、JTB）は5人の子どもを持つ「共稼ぎ」だが、彼女は、現在では社会観念が次第に変わっていて6割から7割の女性が働いている。また少子化の現象は依然として存在しているが、それは観念と関係していて、川崎市には「子沢山」の伝統があるが、東京では多くの人が「一人暮らし」を選択していると認識している。

寸評：多くの中国人は日本の社会や家庭というものについて、男性が外で働き女性が家庭内を仕切るといった役割分担が依然として日本の家庭の様相だという従来からの認識を持っているが、実際には少子高齢化の緩和のために日本は多くの措置をとり、さらに女性への多大な配慮を示している。一方現在の中国では少子化はデータ的にも厳しく、女性に対しては就職における「高いハードル」や昇進における「限度」、そして出産育児における差別などが依然として存在している。日本のこうした変化には驚かされたが、これらはいずれも日本人が学ぶことに長けている、また日本人の切り替えの素早さそして政府の強い支援（経済産業省、厚生労働省、内閣府）といった点に起因している。日中の交流においては互いに経験を汲み取り学び合う事が大切である。中国が日本の経験を基に問題を解決していくことを願っている。

大学名： 外交学院

氏 名： 張炯琪

テーマ： 4.日中間の交流

①日中両国の交流促進における効果的な方法は互いを知る機会を持つことである。京都大学での交流の際、ある日本人学生の話として彼が北京から日本に向かう機内でうるさい中国人を目にしたが、日本から北京に向かう機内では疲れからか大人しかった中国人を目にした。この時彼は中国人の俗に言う「素養の低さ」は実のところ日本に行くことへの興奮の表れなのかもしれないと思った。また日本も経済の高度成長期においては同様の経験をしているため、こうした経験から彼は中国人への理解が生まれた。ホームステイの際、ホストファミリーは自身がかつて中国に短期留学し、ホームステイもし、その際中国の人々が彼にとっても良くしてくれたため、彼もお返しがしたいと述べていた。彼もまた中国人を知る機会があったことから、中国人への友好の気持ちが生まれた。つまり、互いに相手を知る機会を持つ、即ち「人と人との実際の交流」があつてこそ日中間の交流が促進されるのである。

②ソーシャルメディアにおいて中国と日本には隔たりが存在する。京都大学のある学生と今後も連絡を取り合うことになったが、私には Line や Instagram がなく、彼女には WeChat がなかった。その後私は Instagram を、彼女は WeChat をダウンロードし、解決手段ができたが、やはりとても不便である。

③中国人学生はこれまで以上に中国について紹介していくべきである。交流において両国の違いについて述べる際、多くの人は中国について「空気が悪い」、「水の汚染がひどい」、「宿題が多い」、「恋愛ができない」、「トイレが汚い」といった内容ばかりで有益な紹介は何一つとしてない。これは日本人の中国への印象を固定化するもので、交流の効果はいまいちだと言わざるを得ない。

今回の 8 日間の日本訪問では日本のすべてについて完全には知ることができなかったかもしれないが、個人的には、発展途上国である私たちには日本に学ぶべき点が沢山あり、優れた点を吸収してこそ私たちは発展を続けることができ、またそうしてこそ日中両国の友情はより安定し調和がとれると思った。

大学名： 外交学院

氏 名： 劉益琪

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

日本のホテルやレストランでの宿泊や食事の際のスタッフのサービスの細やかさは、私にとって非常に印象深かった。ホテルニューオータニのフロントでは人が訪れるたびに警備員であれフロントのスタッフであれいづれも会釈と挨拶をする。これは中国では想像もつかないことである。だが最も印象深かったのはホームステイにおける出来事であった。私は日本を訪れる前からホストファザーとメールで連絡を取り合っていて、ホームステイ期間中にやりたいことなどを伝えていたが、ホームステイ期間中に私がちょうど誕生日を迎えることについては一言も触れていなかった。だがホームステイ初日にホストファミリー宅での夕食を終えた際、彼らは突然冷蔵庫からシフォンケーキを取り出した。またそのケーキにはチョコレートで「おたんじょうび おめでとうえきちゃん」の文字が書かれていた。そして彼らはケーキを囲み笑顔で私に願掛けをしてろうそくの火を吹き消すよう伝えてきた。その時私は感動で涙がこぼれそうになった。実は私の誕生日がちょうどホームステイ期間と重なることを初めて知った時は多少複雑な気持ちで、異国の地で自分の 20 歳の誕生日を迎えることには一種の流浪に近いものを感じていた。それ以外にもメールでこのことを伝えていなかったのには、ホストファミリーに手間をかけさせたくないという思いもあった。しかし彼らは私の誕生日について気が付き、さらに早々にバースデーケ

ーキやグレープジュースを準備してくれていた。これには、私はホームステイの身ではあるが、真に彼らの生活に溶け込み彼ら家族の一員になれた気がした。また二日目の誕生日当日、彼らは私の江ノ島や鎌倉に行きたいとの願いをかなえるために週末なのに早起きをした。そして江ノ島に向かう道中、ホストファザーが電車の手すりに寄りかかって眠っているのを見かけた瞬間、私はこうした要望を伝えたことを後悔してしまった。

細やかで気配りが行き届いているという点が私の感じた日本人の国民性である。日中両国の交流は長い歴史があり、文化的には同じベースを受け継いでいる。こうした点もまた効果的な交流を可能とするポイントである。日中両国の幅広い交流をベースに中国が日本の優れた点を吸収することができれば、中国の国民の全体的な素養の向上に必ず役立つと思う。

大学名： 外交学院

氏 名： 姜雅琦

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本人のマナーや思いやりについて初めて感じたのは JAL の整備工場で 2 名のスタッフが寒い風が吹く中で立つ位置を変えてまで私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた時で、それはとても印象深かった。

買い物の際の店員のサービス精神の素晴らしさもまた印象的であった。彼らは商品を丁寧に整え、しっかりと包み、両手で客に手渡す。またサービスの過程では常に親切丁寧にまた笑顔で客に温もりを与えていた。

この他、路地等の公共スペースにおいて日本人は常に静かで、大声で話をするのではなく、割込み等の秩序を乱すような行為は尚のこと存在しない。

中国の国民の素養はすでに大きく向上しているが、全体としてこれほどのレベルに到達するまでにはまだ隔たりがあると思った。

同様に特筆すべきは、日本人は「お元気で」、「お気をつけて」、「ありがとう」、「すみません」といったマナー用語を頻繁に使っており、これらは相手が温かい気持ちになり、また心地良さを感じる以外に、ひいては感動するものである。「他人に迷惑をかけない」ことは日本人の国民性の一つの特徴で、もし日本人のこうした品性を学べば、自分もまた他者に温もりを感じさせる人になれるであろう。

そして忘れられないのは、地下鉄駅で職員に乗車路線について尋ねた際に、私が聞き取ることができなかったため、その職員は紙を取り出し路線や乗換駅等を詳しく書いてくれた他、きっぷの購入にも付き添い、私が改札を通るまで見送ってくれたことで、これにはとても感動し、改めて日本のサービス業の素晴らしさに感銘を受けた。

大学名： 外交学院

氏 名： 薛欽月

テーマ： 1.国民性についての理解

4.日中間の交流

今回の 8 日間で私たちは京都、箱根、東京の各大企業、大学及び観光地を訪れ、至近距離で実際の日本を目にし、そして感じる事ができた。日本語を専攻する私はここ数年の学習により日本についてある程度の知識はあったが、今回の活動を通じての様々な体験はこれまでにないものであった。

以下は個人的な視点から見た日本である。

一. 私が感じた日本人の国民性

わずか数日で日本そして日本人について完全に理解するのは不可能だが、その輪郭については見て取ることができた。日本人のマナーや秩序等の常識的なイメージ以外に、今回の活動を通じて私は、日本人はやや保守的で新たな試みをしたがらないという点を目にした。ホストファミリーや大学生との交流において中国に関するテーマについて語る際、彼らはそれらについて全く知っておらず、彼らの中国への認知度の低さについては個人的にとっても不思議に感じた。だが同時に、彼らは中国についてすごく知りたいと思っているわけではない、又は古い認知をベースに印象や観念等を加えたくないとの思いがあるのだと感じた。

二. 日中間の交流

上で述べた点が原因で日中間には多くの誤解や曲解が存在し、両国の友好関係をより難しいものになっていることから、深く幅広い両国間の交流が尚のこと必要となっている。今回の活動を通じて私は、日中交流の形式は様々で、国家的なハイレベルな活動に止まらず、民間的な個人レベルの交流もまた日中友好をサポートするもので、いずれも両国間の友好を強めるものであることを知った。この点は将来的に目指すものでもある。

大学名： 外交学院

氏 名： 余嘉誠

テーマ： 4.日中間の交流

5.アニメなどのソフトパワー

8 日間の交流活動はあっという間に終わり、飛行機が羽田空港に降り立った場面はまだ昨日のように感じられたが、現在私たちはすでに帰国の便に乗ろうとしていた。訪問期間こそ長くはなかったが、とても名残惜しく感じられた。それでも私たちは今回各業界のトップ企業 6 社を見学し、3 度の文化体験を行い、世界でもトップレベルの大学 2 校そして中国駐日大使館を訪れた。それらの体験を踏まえて、日中交流と両国のソフトパワーの視点から、「細かく」日本を見てみたい。

日本の人々の中国への認知度はどの程度なのか？三菱商事では中国で 10 年間の勤務経験があり熱心に西安泡饅を紹介してくれた中国通に出会った他、今回日本では中国に一度行ったことがあるが中国への印象が 10 数年前のものである日本人、そして中国についてほとんど何も知らない高齢者にも出会った。その中でも 1 つめと 3 つめは極端なケースであり、多くの人が 2 つめに該当している印象であった。だが日中友好の実現と確かな発展には両国の相互認識、相互理解が深まる必要がある。人々の相互認識を深める手段において最も効率的で普及している方法は民間交流（特に青少年交流）であり、次に文化の発信だと私は思っている。青年は比較的強い学習許容能力をもっており、将来的に自分たちの思想を教育において次の世代に伝えることができる。時間の関係で私は日本の青年が中国に関してどのような教育を受けているのかを知ることはできなかったが、京都大学では一人中国文化に興味があり個人的に中国語を学んでいる学生がいて、私が彼に中国に行ったことはあるかと尋ねた時に、彼は行ったことがないが香港や台湾には行ったことがあると答えた。私はすぐに「それは中国に行ったことがあるのと同じこと」だと正したが、これで本当に彼らの幼い頃からの考え方を変えることができるのだろうかと感じた。長期的で頻繁な踏み込んだ交流をしてこそ両国の人々が真に客観的にお互いに向き合い、理解し合い、日中の交流というものが実現すると思う。

またソフトパワーについて述べたい。私たち世代の青年でクレヨンしんちゃん、ちびまる子ちゃん、スラムダンクといった日本のアニメを知らない人はいない。その中でも多くの人は ACG 文化の熱狂的なファンで、中学や高校時に日本語を独学する人までいる。その一方中国には誇るべき五千年の歴史等のアドバンテージがあるものの、ソフトパワーの PR においては日本に大きく後れを取っているため、文化の発信等の面において各業界が更なる取り組みをしていく必要があると思う。

視察・交流先、行事



JAL整備工場:根本さんから羽田空港A滑走路に着陸する航空機の説明を受ける。JAL新鋭機A350が後ろに。



JAL整備工場:広大な格納庫内、北京から羽田まで搭乗してきたB787型機と同型機の前で全員集合。



Panasonic Design KYOTO:五感に訴える未来型家電の前で、中川主幹(右)の説明を聴く。



Panasonic Design KYOTO:グループワーク、テーマは、「弁当」。各校発想豊かに、コンセプト、ターゲット、価格など真剣にまとめ上げました。



京都大学:吉田国際交流会館での4グループに分かれての討論会。



京都大学:京都大学シンボルの時計台前で全員記念撮影



京都観光：嵐山の周恩来総理記念詩碑で。「雨中嵐山」を皆で読み上げる



京都観光：高台寺での座禅。執事・寺門浄因さんからの講話が身に沁みました。



京都観光：高台寺での茶道 抹茶、お点前、茶菓、畳、全員全身で体験をしました



新幹線：京都観光を終え、京都から小田原まで「ひかり」号で移動。



箱根観光：宿泊先での記念撮影。色とりどりの浴衣、畳、料理、宴会、源泉での入浴、と温泉文化を味わいました。



ソニー：会社概要説明を頂いた広報CSR部今田真実シニアジェネラルマネジャー、程団長を中心に記念撮影。



ソニー:CreavityTechnologyを実現させるソニーを知るラボ見学後、最後の講義は人事センター・馬さんから中国語で。質問が集中しました。



皇居二重橋:「令和天皇・皇后陛下」がお祝いの会に揃って姿を見せられた二重橋を晴天の中で、見学しました。



三菱商事:西浦代表取締役常務執行役員から歓迎の辞、会社概要説明。右に地域総括部・池田統括マネジャー、人事部女性活躍ダイバーシティ室・中西室長。



三菱商事:歓迎交流会で平井中国総代表・執行役員から中国語でユーモア溢れる歓迎の辞。30名近い中国駐在経験者をご参加頂き充実の時間に。



三菱UFJ銀行:経営企画部中国室・関室長、国際業務部・周調査役からの業務説明後、活発な質疑応答となる。



三菱UFJ銀行:全員で記念撮影。終了後あいにくの雨、バス乗車まで歴史ある三菱UFJ銀行本店下で雨宿りになった。



日比谷松本楼：小坂社長から、孫文と梅屋庄吉の交友史を伺う、初耳の学生が多く、大いに感銘を受ける。



中国大使館：聶佳政治部参事官、程団長を中心に記念撮影、外が雨のため、室内で撮影となりました。



中国大使館：聶佳政治部参事官からの講話を頂き、各校の代表から今回の日本滞在についての報告がありました。



早稲田大学：白木教授のゼミナール学生がほぼ全員参加。白木教授のご指導で、短い時間ながらも濃密な議論、発表となり中国大学生からも好評でした。



早稲田大学：キャンパス内の生協で懇親会。「いつも何度でも」「都の西北」がそれぞれ大学生全員で歌われました。白木教授と程団長を中心に全員で記念撮影。



ホテルニューオータニ：ホテルから出る生ゴミ処理、汚水処理について説明を受ける。



ホテルニューオータニ歓送会：程団長を中心に、杉田専務理事、聶参事官らと全員で記念撮影しました。

ホームステイ



新国立競技場:2020年東京オリンピックでは日本選手、中国選手それぞれの活躍を話題に会話が盛り上がりました。



浅草観光:都内観光でも一番人気、いろいろな海外からの観光客が沢山いて気分爽快な一時でした。



秋葉原でラーメン:ホームステイ家族とともに朝からアニメの聖地・秋葉原の街を満喫し、お昼に醤油ラーメンを食べました。少し塩辛いかな？が感想。



鎌倉円覚寺:鎌倉でも有数の美しさと歴史を誇る円覚寺で。紅葉も味わいながら日本と中国を語り合いました。



浅草寺を見学したのち、隅田川の上から記念撮影。全員が笑顔で会心のショットです！